2009 年度　修士論文

地方小都市の初期協働まちづくりにおける専門家の役割について

－福島県田村市船引町の中心市街地をケーススタディとして―

Study on specialist's role in coproduction of initial development in Local Small Town:
A Case Study in Town Center of Funehiki, Tamura City, Fukushima Prefecture

佐古　奈々美

Sako, Nanami

東京大学大学院新領域創成科学研究科

社会文化環境学専攻

目次

第１章　はじめに

1-1. 問題意識.....2
1-2. 研究目的.....2
1-3. 研究方法.....2
1-4. 用語定義.....3
1-5. 論文構成.....3

第２章　福島県田村市船引町のまちづくりの担い手をめぐる状況

2-1. 福島県田村市船引町の概要.....5
2-1-1. 位置.....5
2-1-2. 空間構造.....5
2-1-3. 歴史、沿革.....6
2-1-4. 産業.....8
2-1-5. 商業.....8
2-1-6. 人口動態.....10
2-2. 船引町の歴史にみるまちづくりの担い手の問題.....11

第３章　まちづくり実験に見るまちづくりの担い手をめぐる状況

3-1. まちづくり実験 2008 の概要.....16
3-1-1. 田村地域デザインセンター（ＵＤＣＴ）の概要.....16
3-1-2. まちづくり実験の概要.....19
3-2. 各企画の概要とプロセス.....20
3-2-1. タウントレイル.....24
3-2-2. 田村味自慢 32
3-2-3. 快適街路実験.....43
3-2-4. イルミネーション.....47
3-2-5. 空き店舗による市民活動展.....52
3-2-6. まちなみペイント.....66

3-2-7. 田村百景.....71
3-2-8. 市民シンポジウム.....76
3-3. まちづくり実験に見るまちづくりの担い手をめぐる状況.....80
3-3-1. 協働まちづくりにおける重要プロセス.....80
3-3-2. 他者との関係性構築.....81

結章　地方小都市における初期協働まちづくりにおける専門家の役割について
結-1. 初期協働まちづくりにおいて必要とされる領域.....85
結-2. 提案：初期協働まちづくりにおける専門家の役割.....86

謝辞.....87

引用・参考文献.....90

第１章
はじめに

1-1. 問題意識
1-2. 研究目的
1-3. 研究方法
1-4. 用語定義
1-5. 論文構成

1-1. 問題意識

人口減少・低成長の時代にあって、地方小都市では、民間による開発や行政によるトップダウンのまちづくりはあまり望めないため、住民あるいは地元企業によるまちづくりが求められる。筆者が関わった福島県田村市船引町には、住居と商店が一体となった建物の多い商店街があり、商業衰退は死活問題であるが、住民の強い問題意識とは裏腹に、まちづくりが実現したものは少なく、参加意欲が削がれていた。地方小都市の住民等によるまちづくりにおいて、実現可能性を分ける要素について明らかにしたい。

1-2. 研究の目的

柏原 2009 はまちづくりを課題解決プロセスだと捉え、不足するプロセス（領域）の欠如によって実現されないことがあり、その不足する領域（中間領域）の担い手の出現によって実現されるとして、不足する領域の担い手を出現させることを中間機能とした。また、中間機能は、決められた主体・組織が担うものではなく、不足領域の内容に応じて、住民等・市職員など様々な主体が中間機能をもつことが明らかにされた。以上の研究より、中間機能は外部者であっても内部者であっても成立するといえる。しかし、中間機能の長期的な担い手については述べられていない。

長期的に中間機能が存在するための方法として、２つの選択肢があるが（①外部者が中間機能を担い続けること、②内部者が中間機能を担うよう変化すること）、本研究では、後者の可能性について考えることとし、以下の２つを明らかにする。

Ⅰ　地方小都市のまちづくりにおいて、地域の住民等・市職員が主体となって企画・実行したもののうち、実現できなかったものの背景

Ⅱ　地方小都市のまちづくりにおいて、地域の住民等・市職員が主体となって実現させるための必要条件

1-3. 研究方法

Ⅰについては、福島県田村市船引町における住民等・市・大学の協働まちづくりの実験的取り組みを対象とし、地域の住民等・市職員が主体となって企画・実行したものうち、実現したものと実現しなかったものの両方について、ヒアリング調査、アンケート調査、

各種資料により比較を行う。

Ⅱについては、福島県田村市船引町における住民等・市・大学の協働事業を対象とし、地域の住民等・市職員が主体となって企画・実行したものうち、実現したものについて、Ⅰの課題をいかに対処していたかを、ヒアリング調査より特定する。

事例選定理由

福島県田村市船引町は地方小都市の典型である（松尾 2008）。また、柏原 2009 によって、①福島県田村市船引町の商業まちづくりにおいて、歴史的に中間機能が不足していたこと、②住民等・市職員と大学のまちづくりにおいて、中間領域に外部者（大学）が出現し、実現に移された取り組みがあることが示されている。本研究では、柏原 2009 と同じく福島県田村市船引町のまちづくり実験を対象とし、協働事業のその後の経過を追う。

1-4. 用語定義

本論で使用する用語の定義を行う。

専門家

「ある領域について、相対的に他者より詳しい人物」とする。

まちづくりにおける専門家

一般に都市計画分野における専門家を想像されがちであるが、まちづくりの課題は都市計画分野で扱う領域に留まらない場合がある。本論では、「ある地域のまちづくりの課題領域に対して、相対的に他者より詳しい人物」とする。

住民等

住民、住民団体、民間企業、企業団体を含めて「住民等」とする。

1-5. 論文構成

第２章では、対象となる福島県田村市船引町の概要、並びに、これまでの報告書より、中間機能の担い手の教育あるいは発掘についての課題や方策を整理し、船引町において、どのように中間機能の担い手を出現させてこようとしたかについて明らかにする。

第３章では、船引町における住民・行政・大学との協働まちづくりである８つのまちづくり実験を対象とし、そのプロセスと経過の比較を行う。

第４章では、第２章・第３章を踏まえ、地方小都市のまちづくりにおける専門家の役割を考察する。

第２章

福島県田村市船引町のまちづくりの担い手をめぐる状況

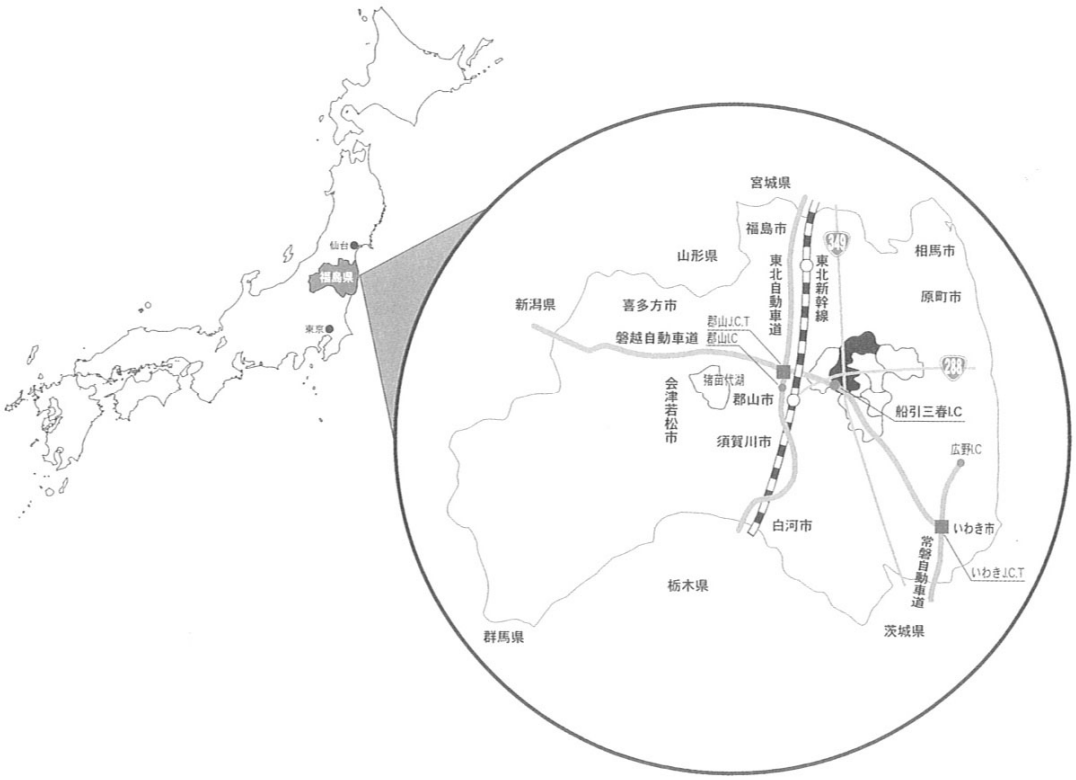
2-1. 福島県田村市船引町の概要
2-2. 船引町の歴史にみるまちづくりの担い手の問題

2-1. 福島県田村市船引町の概要

本項では、第３章でケーススタディを行う福島県田村市船引町の概要について、各種報告書を元に記す。

2-1-1. 位置

福島県の中央からやや東より阿武隈高地のほぼ中央に位置する。面積は 161.16km²である。年間平均気温は 10.5℃で、夏は涼しく風は寒い内陸性の気候であるが、福島県内では比較的降水量が少なく、降雪もあまりない。ＪＲ磐越東線で郡山駅まで２５分、新幹線で東京都心まで約２時間３０分の場所にある。



2-1-2. 空間構造

船引地区は、田村富士と呼ばれる片曽根山のふもとに広がり、中央部を大滝根川が流れる。ＪＴ磐越東線が通り（船引駅）、町内に船引三春Ｉ．Ｃがあり、国道 288 号線と国道 349 号線が交差するため交通の要衝となっている。

2-1-3. 歴史、沿革

明治 22 年の町村制施行により、片曽根山村、文殊村、美山村、瀬川村、移村、芦沢村、七郷村、要田村が成立する。昭和 9 年に片曽根村から船引町へ町制施行し、昭和 30 年に船引町と文殊村、美山村、瀬川村、移村、芦沢村、七郷村が合併する。その後、三春町の一部（要田地区）を編入し、現在の「船引町」が誕生する。

大正 3 年に磐越東線（旧平郡線、郡山・三春間）が開通する。貨物輸送のほとんどは鉄道によって行われる。停車場（駅）の配置と同時に、停車場までの道路（船引駅・永久橋間）もこの頃に整備される。駅前の通りには、商店、旅館など店舗が軒を並べ、新盛場が形成され、この地域の物資集積の中心地となる。

本研究のケースとして取り上げるのは、船引の中心市街地である。

用語	定義
田村市	船引町・常盤町・大越町・滝根町・都路村の５町が合併（平成 17 年）してできた区域。
船引町	芦沢知久、美山地区、移地区、瀬川地区、文殊地区、七郷地区、要田地区、船引地区の８地区が合併（昭和 30 年）してできた区域。
船引地区	昭和 30 年の合併以前の船引地区。
船引地区中心市街地	商業活動が活発に行われていた栄町区、上町区、中町区、大町区の４区域。

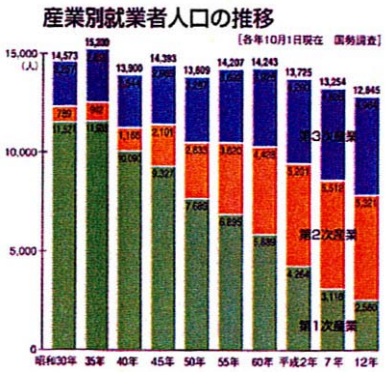
中心地域
中心市街地
郊外部
①中心商店街（栄町商店街）
栄町商店街は大正期に駅の開設がきっかけとなり形成され、昭和 50 年代を最盛期として船引町全域の中心商店街として栄えてきた。現在は郊外への店舗移転や廃業により最盛期の半分ほどの規模に縮小しているが、住み続けており店舗は住宅化している。船引町域全域の中で一番衰退の度合いが激しい。
昭和 40 年代
平成 19 年
②歴史的中心地区
栄町商店街やその他大町・中町商店街、船引駅を含み、大正期より市街化されていた地区を指す。街道沿いに町家型の住宅が並び、これらの裏には農地や大滝根川が流れる。現在は建物の更新や新規の住宅供給はほとんどされておらず、空家・空地の荒廃が目立っている。国道沿いの商店は自動車による来店用に適応したロードサイド型の配置形式で、比較的空き店舗は少ない。
国道 288
大滝根川
③中心市街地フリンジ
田畑や緑地に隣接する比較的敷地の大きな地区で、昭和 30 ～ 40 年代の早期に公共施設や公営住宅が立地するようになり、その後大型店舗や賃貸住宅が立地するようになった。既成市街地が初期に拡大した場所であり、その特質から郊外部とも定義できる。中心地区に比べて、住宅は少ない。
ふれひきパーク
中央公民館と体育館
④新市街地（ニュータウン・新興住宅地）
S57 の石崎ニュータウンや H16 の東部地区区画整理事業による新興住宅エリアである。後者は高台にあり、敷地にも余裕があるが現在の入居戸数は予定の半分にも満たない。この地区は国道バイパス沿いの大型商業エリアに隣接している一方で、船引中心地区にも鉄道を挟んで隣接している。
石崎ニュータウン
石崎ニュータウン
東部新市地
東部新市地
⑥中心市街地から延伸するロードサイド
中心市街地から国道 288 号線沿い文殊春山へと向かうエリアと、国道バイパス源次郎線沿いには大型店舗や工場、病院・福祉施設が立ち並ぶ。前者はＳ 58 頃から、後者はＨ４にバイパスが完成してからである。現在も次々と新規大型店が参入を予定しており拡大している。近くの新規住宅地だけでなく、周辺集落からも大型店や病院目当てでやって来る。
源次郎線沿いリオンドール
リオンドール
⑤郊外農村部
中心市街地の南、片曽根山の麓には坂道沿いに農村型の住宅が見受けられるが、公共施設や民間賃貸住宅、公営住宅も立地している。これらは昭和 40-50 年代にかけて整備されたものである。空間は集落や緑地の広がる農村地区に分類できるが、その中に公共施設が点在しているという意味で郊外の特性が一部混ざった地区といえる。
片曽根山公共施設群
国道 349 号
標倉街道
主要地方道
浪江 - 三春線
新館
県道 本宮 - 常葉線
鹿又
文殊
要田
ＪＲ磐越東線
国道 288 号
都路街道
船引三春ＩＣ
磐城自動車道
芦沢中
主要地方道
郡山 - 大越線
（磐城街道）
本郷
上郷
国道 349 号　磐城自動車道
標倉街道
中心市街地
中心市街地から延長するロードサイド
鉄道以北の新規市街地
郊外農村部
周辺集落・農村地区
建物の集積：末端集落
船引中心地区
地区中心
＊赤字は地区中心のある行政区名
磐越自動車道
高速道路
国道
主要地方道
県道
周辺集落
⑦地区中心
船引地区に対して周辺地区（旧村）７地区は、歴史的に中心地を持つ。現在では、行政局分局、公共公益施設、商店、郵便局、学校などが集積し、これを地区中心と呼ぶことにした。商店の廃業や空家、公共施設の廃止等により地区中心の衰退は末端集落に比べて大きく、船引地区に近い地区ほど商業的中心機能は消失している。
芙山地区の地区中心
移地区の地区中心
⑧集落
農村集落や田畑の広がる農村地帯の中に点在している集落で、地区中心集落以外の集落を総称して呼ぶことにした。現在も各集落は伝統的な居住形態・組織を継承し、空家もまだそれほど発生しておらず、良好な居住環境をなんとか維持しながら住み続けている。一部消滅した山間部の集落はニ地域居住地帯にもなっている。
文殊地区駒場の家屋
芙山地区前田の集落

（松尾 2008 より引用）

2-1-4. 産業

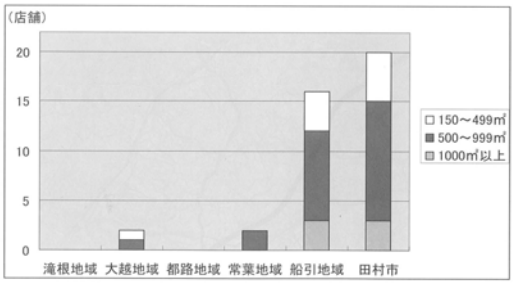
船引町のある阿武隈地方は葉タバコ栽培が盛んだった。藩政（三春藩）時代より行われ、船引、文殊、芦沢、七郷で盛んに栽培された。明治 37 年に煙草専売法が公布・施行され、管理政策による買い上げ制が実施される。葉タバコ栽培は、高い利益は望めない反面、作れば必ず売れる不況に強い作物となった。大正 10 年には郡山専売支局船引出張所が停車場通り（現在のＪＴ跡地）に新設されると、船引周辺で生産された葉たばこが、この駅前出張所に運び込まれ、売買が行われた。昭和 28 年、船引出張所に鉄筋コンクリート２階建の大型倉庫が新設される（現在のＪＴ跡地奥）。タバコ試験場なども立地するが、近年は専業農家が減り、兼業農家が増えている。昭和 59 年には史上最高の生産高（収納代金）４６億７千万（耕作農家 2553 戸）を達成し、１６年連続で日本一の生産量を誇っていた。平成に入り、輸入タバコのシェアが増加し、平成 11 年には、輸入タバコのシェアが４分の１を占める。耕作者の高齢化が進み、また後継者不足等によって、たばこ耕作者が急減し、減反と転作が行われ、葉タバコ耕作面積は減少する。平成 17 年には、耕作農家は 1675 人まで減少した。

船引町の産業別就業者人口の推移より、農業人口が減少し、建設・製造業、商業・サービス業へと産業構造の転換があったことがわかる。



（単位：店舗）

	滝根地域	大越地域	都路地域	常葉地域	船引地域	田村市
1000 ㎡以上					3	3
500～999 ㎡		1		2	9	１２
150～499 ㎡		1			4	5
計		2		2	１６	２０



2-1-5. 商業

商業事業所数は昭和 57 年頃から減少傾向にあるが、一方で従業員数は増加している。この背景には小売店が減少し、大型店舗での雇用拡大が行われたことが推測される。中心市街地の周縁部（国道 288 号線沿いや船引駅北部源次郎線沿い）では、大型店舗が進出している。大型店舗の進出により、近隣商店街の衰退は避けられない問題となる。船引駅前の栄町商店街で商店を営んでいた一部の店舗は、この危機に対応するため、支店を拡大するなど行っている。栄町商店街の店舗は店舗兼住宅であるものも多く、商売の不振は死活問題であるといえる。

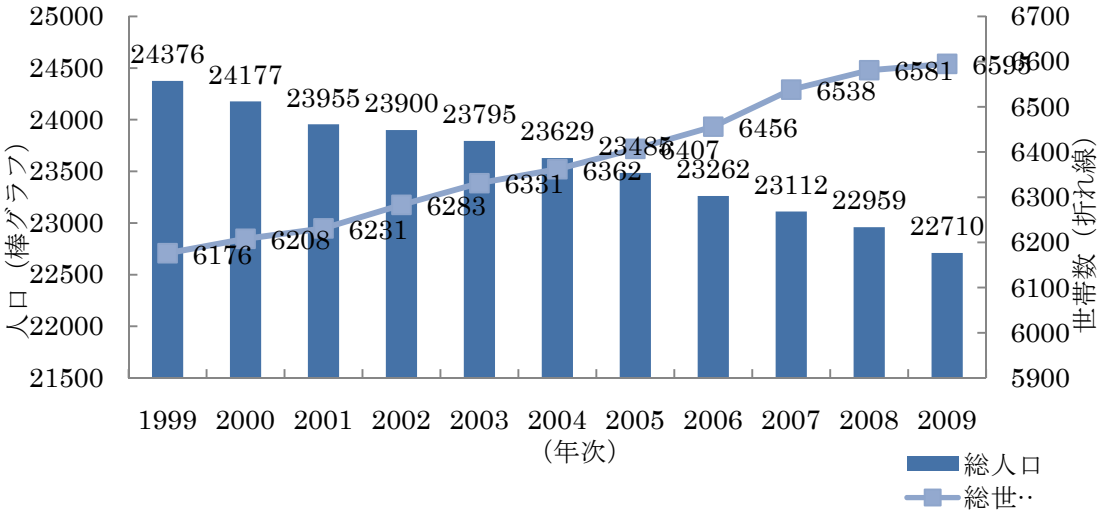
昭和 46 年にはすでに“車社会への対応”を目指し、栄町商工振興会（栄町商店街の活性化を目指す組織）によって「ＪＴから商工会館の敷地へのショッピングセンター設置計画」を作成している。昭和 57 年頃は葉タバコの生産量が全国一を誇っていたにもかかわらず、商店の郡山への流出、大型店舗の進出より、地元商店店にもかなり厳しい状況であることが示されている（『地域小売商業近代化対策調査事業』。）このように、昭和の終わりより、地元商店への問題意識は根強くあった。商店主や振興団体、行政によって、課題解決の計画がたてられ、一部実行もなされているが、過去に行われた商業振興のためのまちづくりの歴史の詳細は『地方小都市のまちづくりにおける中間機能に関する研究　―福島県田村市船引町の中心市街地をケーススタディとして―』（柏原沙織、2008）を参照されたい。

商業まちづくり組織について、柏原 2009 が整理を行っており、以下参照する。

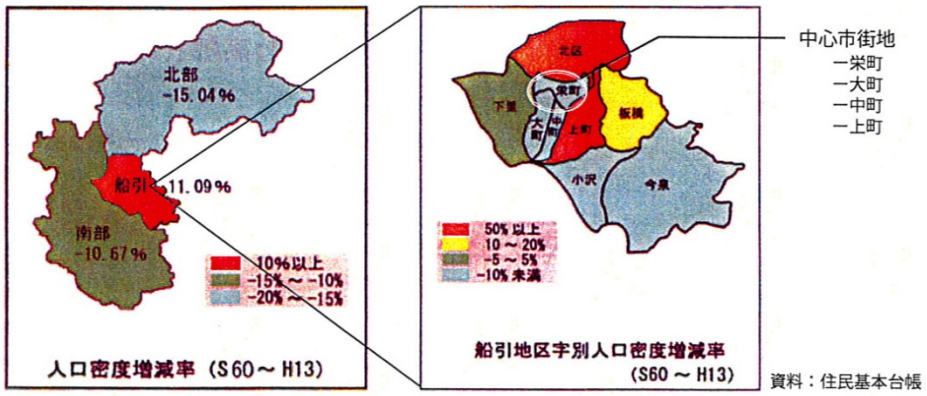
商業まちづくり組織	概要
船引町商工会	船引町内の商店 176 業種 552 の事務所・店舗が加入。最も活発に活動を繰り広げている。売上に陰りが見え始めた昭和 50 年代、商工会青年部による「買っちゃおフェスティバル」を代表として、新しい試みが行われる。一過性の問題解決だけでなく、より根本的な課題の分析・抽出が行われ、繰り返し計画が立てられた。栄町商工振興会との連携は見られない。また、人材不足、人手不足の問題が指摘されている。
栄町商工振興会	栄町商店街の商店主が加入する組織。船引町で中心的な商店街であり、危機感が強く、行政計画へも積極的に参加している。しかし参加しているのは役員だけ、という声もあり、まちづくりに積極的な人材は継続性がないようである。
船引スタンプ会	船引町内の小売業の安定的な固定客確保を目的として、設立。平成 9 年には、スタンプ会青年部主導により、商工会と農協との連携で夕市の開催などを行った。
㈱まちづくりふねひき（ＴＭＯ）	平成 15 年の中心市街地活性化基本計画策定後、商業に特化した事業について船引町中小小売商業高度化事業化構想（ＴＭＯ構想）の策定時に設立（平成 16 年）。株主は、町、商店主でメンバーは 49 人、実働部隊は 2～3 人である。具体的な事業は、船引駅のスポーツジム、栄町商店街内でのアンテナショップの運営など行っているが、計画ではより多くの事業が検討されていた。実施事業数の少ない理由の一つとして、人手不足が挙げられる。運営に人的資源面の無理が出ており、役員のボランティアで賄われている。

2-1-6. 人口動態

船引町の人口は 22,710 人（平成 17 年）であり、人口は減少傾向にあるが、世帯数は暫増している。人口は減少する一方、世帯数は増加していることから、単身世帯の増加や核家族化が起きているといえる。中心部である船引地区の人口密度は 11.09%増加したが、より詳細に見ると、中心市街地である栄町・中町・大町は 10%以上の人口密度の減少が見られ、船引地区の周辺部では 50%以上の人口密度増加があり、郊外新規住宅供給等の影響によって、中心市街地の空洞化が進行し、周辺市街地が拡大していることが分かる。



船引町の総人口と世帯数の変化



2-2. 船引町の歴史にみるまちづくりの担い手の問題

船引町のまちづくりの問題状況について、各種報告書、柏原 2009[1]より整理を行う。

船引町の主な地域課題として、①高齢化の進展・人口減少、②商業の衰退、③産業構造の変化、④中心市街地の機能低下を挙げている。

地域課題	内容
①高齢化の進展、人口減少	・核家族化の進展 ・若者の流出 ・老年人口の増加 ・商業地（栄町、大町、中町）での人口密度の顕著な現象
②商業の衰退	＜商業力の低下＞ ・大型店進出による小売店の売上低下 ・大家（貸家）の貸し渋り ・リーダーシップ・商店のプロフェッショナル意識の欠如 ・少ない駐車場 ・歩行者空間の貧弱さ ・商売甲斐のなさ ＜人的体制づくり＞　※後述
③産業構造の変化	・第１次産業就業人口の大幅減少 ・第２次・第３次産業就業人口の増加 ・小規模商店の減少、日常の買い物の大半は市街地の大型店 ・商店街の非法人化
④中心市街地の機能低下	・山林・田畑面積の減少（都市化） ・中心市街地の空き店舗 ・都市計画道路の改良率（約 72%）に対し、市街地内は未整備
その他 （柏原 2009 のヒアリング調査）	・農業の後継者不足による衰退 ・教育を重視しない行政への批判 ・まちづくりビジョンの非共有 ・人口減少 ・社会的絆の低下 ・文化度の低さ、娯楽がない ・環境問題

[1] 『地方小都市のまちづくりにおける中間機能に関する研究　―福島県田村市船引町の中心市街地をケーススタディとして―』平成 21 年、柏原沙織

特に人的体制づくりについて柏原 2009 は、実行計画の欠如の中で決定的なのが、解決主体の問題とし、計画における具体的な主体編成についての言及がされていないことを指摘している。また、『中心市街地活性化基本計画（平成 15 年）』に挙げられた空き店舗事業（チャレンジショップ、現アンテナショップ）の実施主体の１つに商店街が挙げられているにも拘わらず、商店主がその内容すら共有していないことを指し、解決主体の編成が不可能になっている状況を述べ、民間レベルで実施可能な行動について、この課題が顕著であるとしている。

この人的体制づくりに関する課題の特徴として、

①　商工会の調査報告書には、個人商店の経営努力に主眼が置かれていること

②　昭和から平成にかけて、共同的行動の必要が繰り返し挙げられている一方、解決主体編成については明示されていないこと（平成３年の報告書[2]において、商業活性化に行政・商業者・両者の協働に関する課題について整理をされているが、実行計画は曖昧、としている。）

③　単一主体によるソフト事業は実現可能であること

④　行政側の決断が必要なものは未実施となっていることが多いこと

を指摘している。

人的体制づくりについて、柏原 2009 では商業まちづくりに関する報告書の整理があるが、地域づくりの計画・報告書も含めてみると、目標だけでないものとして、（１）報告書に実施イメージの記述があるものと、（２）まちづくり主体の啓蒙をしているものがある。

（１）報告書に実施イメージの記述があるもの

『船引町　商業活性化ビジョン』平成３年、船引町商業活性化委員会

事業の推進体制は、商業者と行政との協調による事業の推進が不可欠。商業者、町、商工会、関係機関より“船引町まちづくり推進会議”を設置し、継続的な協議の場として機能させ、事業の具体化について議論を深めていく必要がある。若手商業者が中心となり、

2　『船引町　商業活性化ビジョン』平成３年、船引町商業活性化委員会　※内容後述

推進の主体者として積極的に図っていくべきであり、役場、商工会と連携をとりながら、専従スタッフの確保など事務局体制づくりも急務である。実現に向けて活用できる主な事業・融資制度の一覧や事業主体についても付記。

『船引町地域づくり計画（概要版）』平成 10 年、船引町
「地域づくりをすすめるうえでまず組織づくりが必要となる」とし、組織づくりの例として、まちづくり協議会（住民の自発的な活動によるまちづくりに向けて努力を結集し、よりよい地域環境の創造に貢献する）の設立、地域アメニティクラブ（町の個性を守り育て、地域アイデンティティを確立する）の設立のイメージが描かれている。

『船引町地域づくり計画』平成 10 年、船引町
「行政や個人、地域はもちろん、農業・商業・工業・観光などそれぞれの団体・民間企業が共通の目標を持ちつつ、明確な役割分担のもと、自己の選択と責任によるまちづくりを推進する必要がある」とし、事業別に必要な人的機能（調整・体制づくり・情報交換・指導者の確保・協力者の確保・関係者の合意）について記されている。まちづくりの人的機能を網羅的に言及している特徴的資料である。

（２）まちづくり主体の啓蒙をしているもの
『船引町地域小売商業活性化推進事業報告書（まちおこし事業）』平成 6 年、船引町商工会、船引町地域小売商業活性化推進事業委員会
調査における現況や課題編はできるだけ既往調査を踏まえ、商業者の若手グループを中心としたワーキングを調査として位置づけ、実施。ワーキング内容は、商業の先達者にヒアリングをし、その成功や失敗した原因を自ら考えた。「“まちづくりは人づくりから”とよく言われるが、成功した街は必ずリーダーやキーパーソンが存在する。・・・そのリーダー達は、最初からリーダーだった訳ではなく、じょじょに変貌し、成長してきたのである。基本的に“まちづくり”は、誰かがするのではなく、自分達がするという覚悟をもってはじめなければならない。」と記され、商業主の自助努力が重視され、啓蒙をしている。

『若手後継者等体験研修事業報告書』平成 8 年、船引町商工会
目的を「若手の経営者、後継者の資質の向上を図る」とし、中小企業診断士のコーディネートによって、①先進商業施設、商店街の事業等の研修、②自己経営診断方法の研修、③若手後継者との交流懇談を行っている。啓蒙に留まらず、事業として交流懇談を設けていることが特徴的である。

『船引町中心市街地活性化基本計画』平成 15 年、船引町
中心市街地活性化を実現するための課題として、「まちを支える人、組織づくり」を挙げ、

実施イメージについて「機動的な組織」「行政をはじめ、様々な団体の意見を総合的かつ横断的に調整し、プロデュースできる組織」と触れている。また、「リーダー等育成事業」をとして、「経営者や後継者及び今後の独立を考えている方を対象とし、商業活性化の必要性・必然性を検討する勉強会や創業、新規事業進出についての有益な情報や企業経営についての基礎的なノウハウを学ぶ講義等を実施し、商店街のリーダーの養成を図る」とするが、重点整備計画ではない。

『船引町中小小売商業高度化事業構想　船引町　ＴＭＯ構想』平成 16 年、株式会社まちづくりふねひき
「商業の活性化に関わる課題」として内容の一部に「商業者の勉強会やワークショップを行い、消費者や時代の動向に対応できるしなやかな商店街づくりを商業者自らが画策していく」とある。この報告書では、ＴＭＯの事業構想の事業について、事業主体の具体的記述があり、連携が想定されているが、事業計画には連携方策に関する記述はない。

『田村市商業まちづくり基本構想』平成 21 年、田村市
「市と市民等がその役割を認識しながら、商業まちづくりを進めていく」とし、県・市・市民・商業者・商業団体の各主体の役割を記述している。その中で人材体制づくりについての記述として、商業団体が「タウンマネージャー等の人材育成や確保」とある。

小結．船引町のまちづくりの担い手をめぐる状況

商業まちづくりでは人的体制づくりの必要は早くから叫ばれ、研修やワークショップなど、商店主の自助努力の促進に向けた啓蒙活動が、商工会を中心に実施されてきた。また、まちづくり全体の計画においても、人材育成・人的体制づくり、或いは協働の必要は繰り返し言及されてきたが、それはまちづくりの担い手の支援方法が今だ見つかっていないことの裏返しだといえる。

第３章

まちづくり実験に見るまちづくりの担い手をめぐる状況

3-1. まちづくり実験 2008 の概要
3-2. 各企画の概要とプロセス
3-3. まちづくり実験に見るまちづくりの担い手をめぐる問題

3-1. 田村まちづくり実験２００８の概要

本項では、第４章で詳述する田村まちづくり実験２００８の概要について記す。

3-1-1. 田村地域デザインセンター（ＵＤＣＴ）の概要

田村まちづくり実験２００８は、住民・行政・田村地域デザインセンターの協働によって行われた。ここではまず、田村地域デザインセンターの概要を示す。

ＵＤＣＴの理念

まちづくりを牽引する“新しい公共体”の確立をめざし、行政と地域と大学が協働する場であり、まちづくりの研究・実践を行う地域密着型のシンクタンクである。持続可能な地域社会の構想、計画、実践を行う。

組織、構成メンバー

３つの構成団体（田村市、田村市行政区長連合会、東京大学）と、趣旨に賛同する協力団体[3]（福島県三春土木事務所、栄町商工振興会、菅谷を明るく元気にする会、田村市商工会広域連携協議会、たむら農業協同組合）からなる。センター長は北澤猛であり、田村市長が顧問を務める。副センター長の東京大学特任研究員（週２日勤務）と２名の常勤スタッフ（田村市臨時職員）がＵＤＣＴの日常業務を行っている。また、田村市プロジェクトチームとして、１０名の田村市職員（建設部都市計画課５名・産業部商工観光課１名・市長公室１名・総務部企画課１名・大越行政局産業建設課１名・滝根行政局産業建設課１名）の他、東京大学空間計画（北澤猛）研究室が連携業務を行っている。

資金

全額、田村市の拠出金による。

[3] 2009 年 8 月現在

建物・場所の説明

船引駅前通り（栄町商店街）のほぼ中央に位置する。空き店舗を活用して設置された。１階を集会スペース・事務スペースがあり（２階は利用していない）、トイレの開放の他、らくらくタクシー[4]の乗り合い所ともなっている（２００９年～）。設立当初は、市役所内にＵＤＣＴスタッフのデスクがあり、そこで業務を行っていたが、中心市街地の再生に現場で取り組むシンボルの“まちなか”拠点として移動する。

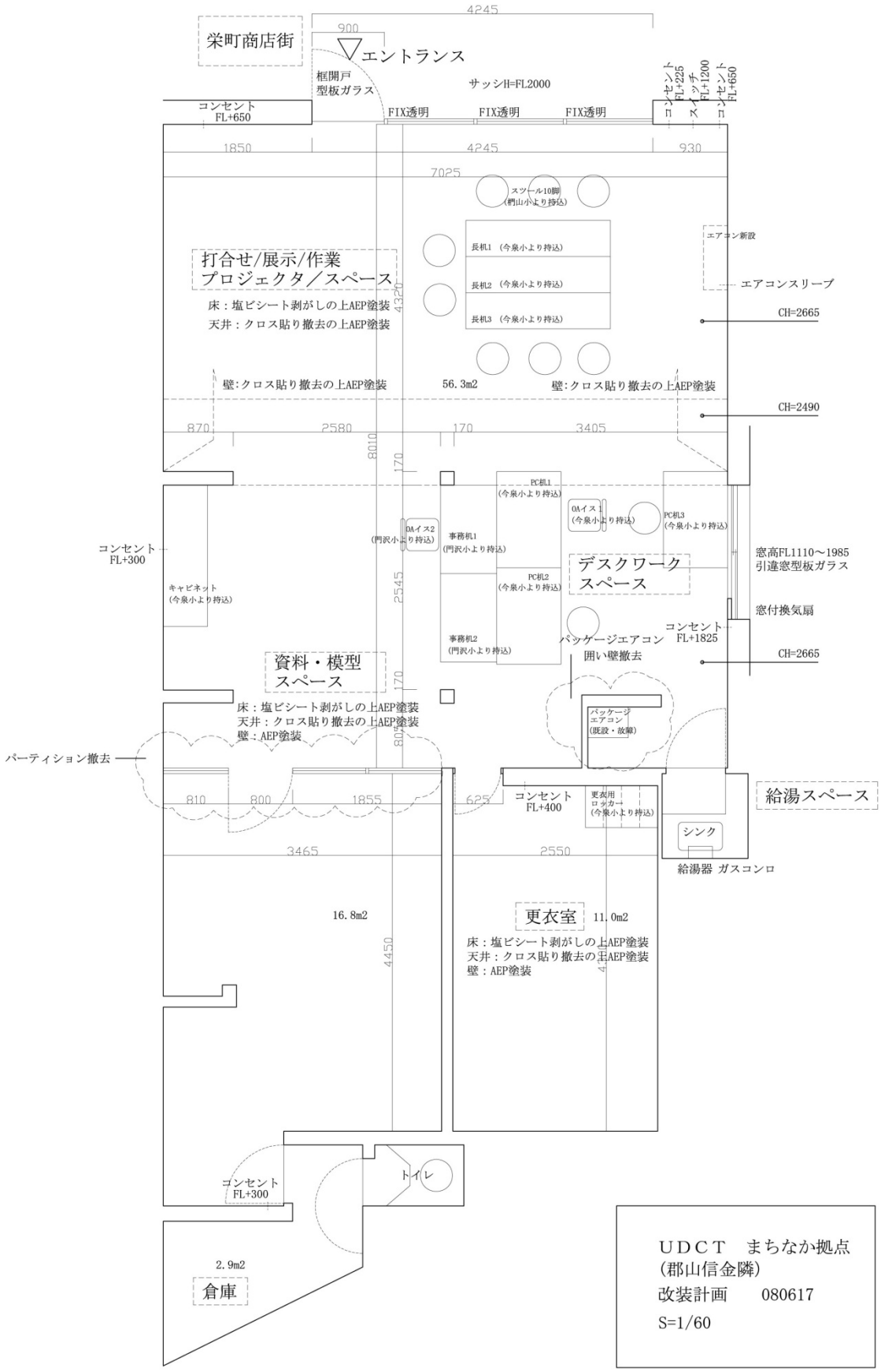
情報の受信送信[5]

よく用いられる情報発信手段（広報）は、「ホームページ」「回覧板」「メールでの連絡」「関係のある人へのダイレクトメールでの連絡」「マスコミへのプレスリリース」「案内文書の公民館・行政局への配布」であり、たまに用いられる情報発信手段は、「報告書」「パンフレット」「田村ジャーナル」「説明会」「新聞折込チラシ」「市の広報」「他の集まりへの参加」「店や家に顔を出す」「案内文書の小・中・高校への配布」「ポスターの設置」である。

よく用いられる情報受信手段は、「週２日の駐在」「市プロジェクトメンバーに聞く」「栄町商工振興会会長に聞く」であり、たまに用いられる情報受信手段は、「他の集まりへの参加」「店や家に顔を出す」「アンケートの実施」「集会（主要メンバーに集まってもらう）」「地元の人と飲みに行く」である。

4　オンデマンドタクシー。乗客の希望があった時に向かえに行く乗合タクシー。㈱まちづくりふねひき（ＴＭＯ）が運営。

5　ＵＤＣＴ副センター長へのヒアリングより


栄町商店街
エントランス
4245
900
框開戸
型板ガラス
サッシH=FL2000
FIX透明
FIX透明
FIX透明
コンセント FL+650
コンセント FL+225
スイッチ FL+1200
コンセント FL+650
1850
4245
930
7025
スツール10脚
(門山小より持込)
長机1 (今泉小より持込)
長机2 (今泉小より持込)
長机3 (今泉小より持込)
エアコン新設
エアコンスリーブ
CH=2665
打合せ/展示/作業
プロジェクタ／スペース
床：塩ビシート剥がしの上AEP塗装
天井：クロス貼り撤去の上AEP塗装
4320
壁:クロス貼り撤去の上AEP塗装
56.3m2
壁:クロス貼り撤去の上AEP塗装
CH=2490
870
2580
170
3405
8010
170
PC机1
(今泉小より持込)
OAイス1
(今泉小より持込)
PC机3
(今泉小より持込)
OAイス2
(門沢小より持込)
事務机1
(門沢小より持込)
コンセント
FL+300
窓高FL1110～1985
引違窓型板ガラス
デスクワーク
スペース
キャビネット
(今泉小より持込)
2545
PC机2
(今泉小より持込)
窓付換気扇
コンセント
FL+1825
事務机2
(門沢小より持込)
パッケージエアコン
囲い壁撤去
CH=2665
資料・模型
スペース
床：塩ビシート剥がしの上AEP塗装
天井：クロス貼り撤去の上AEP塗装
壁：AEP塗装
170
8075
パッケージ
エアコン
(既設・故障)
パーティション撤去
810
800
1855
625
コンセント
FL+400
更衣用
ロッカー
(今泉小より持込)
給湯スペース
シンク
3465
2550
給湯器 ガスコンロ
16.8m2
更衣室
11.0m2
4450
床：塩ビシート剥がしの上AEP塗装
天井：クロス貼り撤去の上AEP塗装
壁：AEP塗装
トイレ
コンセント
FL+300
2.9m2
倉庫
ＵＤＣＴ　まちなか拠点
(郡山信金隣)
改装計画　　080617
S=1/60

取り組み

ＵＤＣＴが設置される以前に、田村市と東京大空間計画研究室による共同研究によって、２００７年に『田村市中心市街地まちづくり基本方針』が策定された。その後、方針を元にまちづくり実験２００８年が実施され、まちづくり実験の結果と研究室による調査を踏まえ、『田村市中心市街地まちづくり基本計画』が策定された。２００９年は、まちづくり実験と計画の内容を踏まえ、フォローアップ事業として、具体的事業の検討会やイベント事業が行われた。また、２００８年には『滝根まちづくり基本方針』が策定され、２００９年には『大越まちづくり基本方針』が策定予定である。その間、研究室を中心として、船引中心部・船引郊外農村部・滝根・大越における空間調査・ヒアリング調査、ワークショップが行われている。

3-1-2. まちづくり実験の概要

田村市中心市街地まちづくり基本方針を踏まえ、より具体的な計画策定を目的として社会実験を行う（２００８年１１月１３日～１月末)。他の目的として、社会実験を通して、（住民や市職員など地元が)「案外栄町通りはいい」「夜ぞろぞろ歩くのは案外いい」「捨てたもんじゃない」という気持ちを実感してもらうことも挙げられている。[6] ９つの企画が実施され、うち８つが地元を主体とした実験が想定されている。地元を必ずしも主体としない企画として、「アーティストによる滞在企画提案」を行っており、東京・横浜で活動するアーティストと、竹内昌義＋東北芸術工科大学が参加した。地元を主体とした８つの実験は「タウントレイル」「田村味自慢」「快適街路実験」「イルミネーション」「空き店舗による市民活動展」「まちなみペイント」「田村百景」「市民シンポジウム」が行われた。この８つの内容・プロセスとその後の経過についての詳細は後述する。

まちづくり実験の実施主体として、まちづくり実験実行委員会が設立され、栄町商店街・ＵＤＣＴ（田村市・田村市行政区長連合会・東京大学）が構成員であった。後援として、福島県県中建設事務所が携わった他、たむらスポーツクラブ・船引町建設業組合・船引高校・栄町若連会・菅谷を明るく元気にする会・竹炭工房都美・船引町ボランティア会・ヤブキユミ氏・吉田正市氏・池田淳氏が協力した。

元々は、駅前通り（栄町商店街）の一方通行化の社会実験を主に企画されていたが、地元の了解が得られず、見送りとなった。駅前通り（栄町商店街）は県道であるため、道路管理者である県（三春土木事務所）の協力を得ながら、一方通行化の社会実験に付随して、さまざまな取り組みを同時に行うことを狙いとしていた。そのために県が後援として参加している。県の支援企画は、百景・シンポジウム・タウントレイルの三つとし、県から地元コンサルタント会社に委託して、運営補助を行う。当日運営協力者として、意欲的な県職員が参加することもあった。

---

[6] ＵＤＣＴアドバイザーのヒアリングより

3-2. 各企画の概要とプロセス

本章では、まちづくり実験前後の船引中心地区におけるまちづくりを対象とし、実験以降も企画が実現しているか、実現しているとしたら、どうして実現したか、また、実現していないとしたら、どうして実現していないのか、ということを考察する。

調査方法

まちづくり実験実行委員会の議事録、資料、関係者のヒアリングより把握する。

No	年月日	所属	役職	参加したまちづくり実験
1	2009 年 11 月 16 日	商店	店主	方針検討委員会 2007
2	2009 年 11 月 16 日	商店	店主	田舎貸します事業検討会 2009
3	2009 年 11 月 17 日	商店	店員	田村味自慢 2008 快適街路実験 2008
4	2009 年 11 月 17 日	商店	バイヤー	田舎貸します事業検討会 2009
5	2009 年 11 月 17 日	商店	店主	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
6	2009 年 11 月 18 日	商店	店主	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
7	2009 年 11 月 18 日	旅館	店主	田村味自慢 2009
8	2009 年 11 月 18 日	ＵＤＣＴ	常勤スタッフ（市臨時職員）	まちづくり実験以降全て チクテル担当
9	2009 年 11 月 18 日	飲食店	店主	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
10	2009 年 11 月 19 日	商店	―	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
11	2009 年 11 月 19 日	旧商店	所有者	田村住宅検討会 2009
12	2009 年 11 月 19 日	商店	店主	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
13	2009 年 11 月 19 日	商店	社長	田村住宅検討会 2009
14	2009 年 11 月 20 日	田村市職員	市プロジェクトチーム	共同研究より全て

				田村住宅検討会 2009
15	2009 年 11 月 20 日	商店	店主	田村住宅検討会 2009
16	2009 年 11 月 20 日	商店	店主	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
17	2009 年 11 月 20 日	田村森林組合		田村住宅検討会 2009
18	2009 年 11 月 20 日	商店	店主	田村味自慢 2008
19	2009 年 11 月 23 日	商店	店主	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
20	2009 年 11 月 23 日	商店	店主	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
21	2009 年 11 月 23 日	商店	店主	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
22	2009 年 11 月 24 日	イラストレーター		空き店舗による市民活動展 2008
23	2009 年 11 月 24 日	田村市職員（船引公民館館長）	前市プロジェクトチーム	まちづくり実験 2008 ウォーキング 2009
24	2009 年 11 月 24 日	栄町区長		方針検討委員会 2007 まちづくり実験 2008 イルミネーション 2009 田舎貸します事業検討会 2009
25	2009 年 11 月 24 日	商店	店主	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
26	2009 年 11 月 25 日	商店	店主	方針検討委員会 2007 まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
27	2009 年 11 月 25 日	田村市職員	市プロジェクトチーム	共同研究より全て 田舎貸します事業検討会 2009
28	2009 年 11 月 26 日	建設会社	代表取締役	まちなみペイント
29	2009 年 12 月 7 日	商店	店主	空き店舗による市民活動展 2009
30	2009 年 12 月 14 日	田村市職員	市プロジェクトチーム	共同研究より全て

				田村住宅検討会 2009
31	2009 年 12 月 14 日	ＵＤＣＴ	副センター長	まちづくり実験以降
32	2009 年 12 月 15 日	田村市職員（船引公民館館長）	前市プロジェクトチーム	まちづくり実験 2008 ウォーキング 2009
33	2009 年 12 月 16 日	商店	店主	（空き店舗による市民活動展 2008）
34	2009 年 12 月 17 日	商店	店主	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009
35	2009 年 12 月 18 日	ネットＴＶ	主宰	空き店舗による市民活動展 2008 田村味自慢 2009
36	2009 年 12 月 25 日	ＵＣＤＴ	アドバイザー	共同研究より全て
37	2010 年 1 月 8 日	ＵＤＣＴ	副センター長	まちづくり実験以降
38	2010 年 1 月 12 日	イラストレーター		空き店舗による市民活動展 2008
39	2010 年 1 月 13 日	ＵＤＣＴ	副センター長	まちづくり実験以降
40	2010 年 1 月 21 日	商店	店主	まちづくり実験 2008 田村味自慢 2009 イルミネーション 2009

分析方法

各企画とその後の取り組みを対象に、

①　「住民等・市職員を中心に企画が実現したもの」と「住民等・市職員を中心に企画が実現していないもの」、「住民等・市職員以外を中心に企画が実現したもの」に分類する。

②　さらに、①の「住民等・市職員を中心に企画が実現したもの」・「住民等・市職員を中心に企画が実現していないもの」について、それに関わった個人（団体）のプロセスを、

Ⅰ問題意識／やりたいことがある
Ⅱ提案する場があった
Ⅲ他主体との関係性があり実行した
Ⅳ他主体との関係性があり継続した
Ⅴ別に提案する場があった

に分類する。

3-2-1. タウントレイル

内容－２００８　まちづくり実験

２００９年１１月１５日・１６日の２日間、船引町内で３コースに分かれて、まち歩きを行った。参加費は無料である。

目的は以下である。
①地域資源の再発見。まちのことを知る、資源や風景の再発見の機会とする。
②市民の健康増進をはかる。楽しみながら効果の視覚化。
③交流人口の増加。観光資源ルートマップづくりにつなげる。

ＪＴ跡地の倉庫をスタート地点として、「３０分コース」「２時間コース」「３時間コース」の３コースで、事前申し込みのあった１０１名の他、当日の参加者もいた。休憩所がなかったが、ルート途中の店舗やお寺がトイレの開放を行う。タウントレイル後は、ＪＴ事務所跡にて、豚汁を振る舞うほか、あぶくま天然水やランドリーバッグが配布された。開始式では、まちづくり実験開催記念式を兼ねて、花火が打ち上げられた。

シンポジウム参加者へのアンケート（５４名）では、良かったという意見が９割だった。タウントレイル参加者へのアンケート（３０分コース、２０名）では、コースの短さが指摘された。“良い印象を持った道や場所”についての質問では、阿久津稲荷神社・煙草神社（１４票：１人３箇所選択式）が挙げられたが、“良くない印象を持った道や場所”でも阿久津稲荷神社・煙草神社（４票）が挙げられた。古民家群（４票）も挙げられている。

２時間コースのアンケート（４１名）では、コースの長さについて「ちょうど良い」と答えた人が多かった（３３名）。親子での参加を募集したことに対して、「親子でなくても自由に参加したい」という意見があった。“良い印象を持った道や場所”は舘山公園・秋葉神社が多く（３０票：１人３箇所選択式)、“良くない印象を持った道や場所”は全体として少なかった。スポット以外の意見が多数挙げられた。(「懐かしい感じがして心が安らいだ」「景色がきれいだった」「あぜ道みたいな所を歩くのがおもしろかった」「田園風景がよい」)“良くない印象を持った道や場所”は全体として少なかったが、スポット以外の意見として、「どぶ臭い」「道が細くてちょっと怖い」「私有地に入ってる気がした」「裏通りが汚い」など船引の屋外空間の課題が指摘された。

３時間コースのアンケート（１６名）では、コースの長さについて「ちょうど良い」と答えた人が多かった（１４名)。“良い印象を持った道や場所”は大雷神社と東光寺が多く

（各９票：１人３箇所選択式)、“良くない印象を持った道や場所”はほぼ挙げられなかった。

内容－２００９　まちづくり実験以降

田村市中心市街地まちづくり基本計画の検討報告書では、タウントレイルの改善案として、「まちあるきマップの作成」「住民ワークショップによるマップ作成」「歴史や名所の説明を加えた看板・サインの設置」「万歩計の使用（健康グリーンツーリズム)」「ゴミ拾いや清掃（自然文化散歩)」が挙げられている。

社会教育振興会が主体として行うウォーキングイベントとして、２００９年１０月１１日に実施する。ルートは１時間コースと２時間コースの２種類で、参加費は無料である。スタート・ゴール地点は田村市船引公民館前駐車場を利用した。

２００９年は、コースの企画段階で、市民のおすすめスポットのアンケートを実施している。また、万歩計を５０個貸し出した。コース沿道では、２００８年に休憩所を開放したお寺が、再び休憩所を開放した。また、沿道沿いの神社では、自主的に抽選会が催された。ウォーキング参加者の中にいた、コース沿道の住民が、自主的に草刈りを行い、歩きやすいようにという配慮を行った。ゴール地点では、１等折りたたみ自転車の抽選会が社会教育振興会によって開かれた。

ウォーキング後には、アンケートが行われる。片面はウォーキングに関する質問で、片面は万歩計利用者への質問が行われる。

実行プロセス―２００８　まちづくり実験

地元スポーツ団地、田村市プロジェクトチーム（A氏他）、商工会婦人部、研究室学生、ＵＤＣＴ、地元コンサルタント会社、福島県（福島県県中土木事務所三春事務所）によって運営される。

研究室学生からまち歩きの提案がなされる。A氏は以前からこのような企画を考えており、コース案もあったため、A氏と学生が中心となり、まち歩きのルート設定を行う。ルート途中に休憩所が少なかったため、学生の依頼によって、お寺のお手洗いを開放する。A氏は、豚汁の提供を企画し、自ら商工会婦人部に依頼する。また、まち歩き後に、あぶくま天然水（地産の水）とランドリーバッグを配ることを呼びかけ、あぶくま天然水はUＤＣＴが用意し、ランドリーバッグは地元スポーツ団体が持ち寄った。地元スポーツ団体は、A氏が設立に関わった団体であり、タウントレイルの当日運営（誘導など）も行っている。

参加者の募集は、ＵＤＣＴが案内文書を作成し、回覧板、公民館、学校に配布する。
シンポジウム参加者へアンケートが行われた。また、タウントレイル参加者へコース別にアンケートを実施している。実験後に、感想や改善案を話す場として、第２回シンポジウムが行われた（２００９年１月２９日）。

実行プロセス―２００９　まちづくり実験以降

社会教育振興会[7]によって運営される。

タウントレイル（２００８年）で積極的に動いていたＡ氏が社会教育振興会に働きかけ、ウォーキングとして引き続き行われる。

ウォーキングを主催した社会教育振興会は、二年に一度地区体育祭を催していたが、参加者が減っていた。次はどうするか、という社会教育振興会の話し合いに、同振興会の事務局がある公民館で働いていたＡ氏が出席していた。社会教育振興会は気軽に参加できるスポーツを探していたので、席上で、まちづくり実験でタウントレイルをしたという話をして、コース図を見せた。それから、体育祭に代わるものとして、ウォーキングを行うこととなった。Ａ氏が始めに働きかけた後は、ルートや運営についてはＡ氏の部下が携わる。

Ａ氏は以前、公民館に勤務した経験があり（市役所勤務歴３７年）、イベント等の段取りは分かっていたので苦労はしなかった。Ａ氏の考えでは、①コース設定、②実施要項の作成、③協力者の人選、④参加者を集める方法などを考えて進めていた。県などの協力はあったが、補助金をもらうためにかえって制約ができて大変だったため、気の合った仲間で行うべきと感じたと振り返っている。

社会教育振興会の話し合いにおいて、委員より、「小さい頃によく遊んだいいところなどがある」という意見が上がり、Ａ氏の部下が、おすすめスポットを回覧で調査を行う。また、委員より、線路より北側の見るところがあるとのことでルートを改善する。タウントレイルアンケートより、３０分コースは短いという意見があったので、設定時間を１時間、２時間に延長する。Ａ氏の部下は、ルートについて他にも精力的に準備を行っており、ＵＤＣＴに去年のルート設定の意図や反省点のヒアリングを行う。新たに始めた抽選会も委員からの提案で、「参加するだけでは、楽しみがないのでは」ということで企画を行った。ウォーキングの前身である体育祭で抽選会を行われていた。

万歩計案は、まちづくり実験においても、実施が検討されていた。しかし、まちづくり実験ではコスト的、時間的に間に合わず、万歩計案は実施されなかった。まちづくり実験報告書には、課題と展望として「カロリー消費量を計測できる万歩計を使用するなど、健

[7] 構成員は以下の通り。各区長、公民館長、社会教育委員、文化協会長、体育協会長、小中高等学校、小中高等学校ＰＴＡ会長、子ども会育成会連絡協議会長、若連会長、更生保護女性会長、商工会支部長、観光協会支部長、長寿会長、消防団分団長、交通安全協会分会長、交安協会分会長、子ども会育成会長。会長は栄町区長、事務局を公民館が務めている。

康増進の視覚化（健康モニタリング）も連携してできるよう検討したい」という項目が上がり、基本計画検討報告書には「ＩＴ機器などを利用してカロリー消費や低炭素貢献が目で見て分かるようにする」という項目が上がる。そのような経緯から、２００９年度に市が万歩計について予算化を行った。市の事業予定内容と目的をＡ氏とＵＤＣＴが、Ａ氏の部下に伝えた。

２００８年に引き続き、沿道のお寺がウォーキング期間中に、法事があったにもかかわらず、休憩所を開放している。

ウォーキング後のアンケートは、ＵＤＣＴからの呼びかけで、ＵＤＣＴと社会教育振興会が共同実施している。

今後のウォーキングについてＡ氏は以下のように語っている。

「今度の４月２４、２５日くらいにやろうと話しているが、会合はまだ始まっていない。船引の区長さんが集まって、これから具体的なことを話す。

市（の施策）では、健康ウォーキング大会を旧町で持ち回りでしていて、今年は都路で、来年は常盤。船引の時はタウントレイルコースを使ってやりたいと思っている。

これからできれば、万歩計とマップを駅や福祉センターに置いて、市外から来た人も万歩計を使えて、もっと自由に歩いてもらうようにしたい。広域のマップも作りたいと追っていて、もう１種類コースを考えている。小沢の桜や人形様を通って、６時間くらいのもの。汗を流して、料理を食べてもらう。船引駅をスタートとゴールにして、片曽根山や大滝根川の河岸を歩くコースもいい。安部文殊に行くには登って降りないといけないが、鹿島神社の三匹獅子舞、市役所、煙草神社、稲荷神社を通って駅に帰ってくるコースも考えている。

万歩計は市の保健課に置かれている。財政課に相談したら、健康に関することだから保健課に、ということになった。保健課に置いていたら、市外から来た人の利用が難しくなることを懸念している。

マップを郡山にも置きたいと思っていて、ＪＲに交渉する。ＪＲ郡山駅の２階に昔話をする待合所があって、“語り部”というのがある。そこにマップを置いていたら、来てくれるのではないかと考えている。語り部には、何人か船引からの個人ボランティアがいる。週に１回は駅にいるはず。その方達にお願いできないかと考えている。」

Ａ氏は、３７年間市役所に勤めているが、「前の担当課で得たものは、次の担当課でうまく利用すればいいと思っている。参考になるものがある。」と話す。ＵＤＣＴが２００９年以降に計画フォローアップ事業として行っている田舎かします事業を提案したのもＡ氏である。

「１０年くらい前から温めていた。まだ色々ある。担当課で利用できるものがあればと思っている。お盆やお正月に農家を貸してはどうかと思った。東京にいて田舎のない人に貸す。」と話す。

Ａ氏は、社会教育振興会、小学校、高校、船引ボランティア会、田村スポーツクラブ、商工会婦人部、竹炭工房都美（空き店舗による市民活動展）など人とのつながりが多い。ＵＤＣＴが間借りしている建物もＡ氏の親戚が所有する店舗であった。まちづくり実験を始め、ＵＤＣＴの様々な局面においてコーディネーター役を果たしている。

Ａ氏はまちづくり実験準備中に、実験ごとのマニュアルづくりも提案し、まちづくりに積極的で、かつ人望の厚い人物であるといえる。

小結

タウントレイルは、社会教育振興会主催のウォーキングへと名前を変えて、取り組みが継続している。継続した契機となったのは、元市プロジェクトチームメンバーによる、社会教育振興会でのウォーキングの提案である。前年度と比較し、いくつもの工夫も行われた。

そこに至るまでのＡ氏プロセスを整理すると、以下である。

Ⅰ　問題意識／やりたいことがある

ウォーキング、広域ルート、市外から来た人への観光マップ

Ⅱ　提案する場があった

まちづくり実験

Ⅲ　他主体との関係性があり実行した

田村スポーツクラブ、商工会婦人部（以前の係での知り合い）、市ＰＴ、ＵＤＣＴ

Ⅳ　他主体との関係性があり継続した

社会教育振興会

Ⅴ　別に提案する場があった

社会教育振興会委員会

1. タウントレイル　まちづくり実験とその後のプロセス比較

まちづくり実験

種類		企画1	企画1-1	企画1-2	企画1-3	企画1-4	準備	準備		準備	実施	評価	評価
意志・課題	まちづくり実験をします	タウントレイルをします	ルート設定	マップを作ろう	歩いた後に豚汁を出そう	あぶくま天然水とランドリーバッグを配ろう	休憩所を設けよう・歩きやすくしよう	当日の運営協力者を探そう	協力します	参加者を呼ぼう	実施	タウントレイル参加者へのアンケート	シンポジウム参加者へのアンケート
働きかけ・実施主体						地元スポーツ団体			地元スポーツ団体		地元スポーツ団体		
			市PT		市PT	市PT	お寺	市PT	市PT	市PT	市PT		
					商工会婦人部						商工会婦人部		
		学生	学生	学生			学生				学生	学生	
	UDCT	UDCT	UDCT	UDCT		UDCT		UDCT	UDCT		UDCT	UDCT	UDCT
				コンサル					コンサル		コンサル		
								県	県	UDCT	県		

マップ代（コンサル）　　コンサル代（県）

まちづくり実験以降　ウォーキング

種類		企画2	企画2-1	企画2-2	企画2-3	企画2-4	準備	準備	準備	準備	準備	実施	評価
意志・課題		体育祭の代わりにウォーキングをしては？	ルート設定	マップを作ろう	市民におすすめスポットを聞いてみよう	ウォーキング後に抽選会を開こう	休憩所・清掃	運営者	万歩計を用意しよう	参加者を呼ぼう	沿道イベント	実施	ウォーキング参加者・万歩計利用者へのアンケート
							沿道の方（任意）						
働きかけ					市民		お寺				神社（任意）		
		社会教育振	社会会	社会会	社会会	社会会	社会会	社会会		社会会		社会会	社会会
		公民館											
				市					市				
			UDCT	UDCT					UDCT				

マップ代（市：都市計画課）　　運営費（市：体育祭補助金）　万歩計代（市）

3-2-2. 田村味自慢

内容－２００８　まちづくり実験

栄町商店街添いの店舗で、期間限定の特別メニューを出す。

目的は以下である。
①地域独自の地元の味、もてなしの味を紹介する。
②店舗の連携をはかり、店舗利用しやすくする。
③地元のおいしいマップづくり。交流促進。

実施日は１１月１４日・１５日で、お酒とおつまみが一緒になった「ほろ酔いセット」（一律１０００円）を提供した。全１２店舗が参加し、味自慢マップを作成した。お酒のセットだけでなく、精肉店がチャーシューを期間限定で復活させた他、アンテナショップでは、子ども向けメニューとして、ソフトドリンクのセットを提供した。現在営業している店舗だけでなく、閉業していたお店が期間限定で営業を行った。

シンポジウム参加者へのアンケート（３２名）では、「とてもよかった」「よかった」という意見が８割近かった。「それぞれの味が出てた」「もっと多くの店を紹介してほしかった」という前向きな声が聞かれた。店舗へのアンケート（全１２店舗）では、「一店でできないことが何店でやれば出来る」「多くの方に店を知ってもらうには良い機会」という声がある一方、「お客は関係者が多かった」という声もあった。また、“継続して行うには特に何が必要だと思いますか”という質問に対して、「情報発信」（１０店舗）、「市民団体の協力」（８店舗）、「行政の協力」（７店舗）が多く挙げられている。

1：とんとん　7：ドルフィン
2：杏　8：慶慶飯店
3：よろづや　9：鮨信
4：御代田
5：鮨やすけ
6：田舎通

内容－２００９　まちづくり実験以降

田村市中心市街地まちづくり基本計画の検討報告書では、田村味自慢の改善案として、「規模の拡大」「定期的な開催」「地元イベント合わせた開催」「田村独自の味を紹介できるメニュー」が挙げられている。

２００９年度は、この年初めて行われた五月祭（地元イベント）のいち企画として行われる。呼びかけだけではなく、公募をかけ、１３店舗が参加した。２００８年の１２店舗より若干増え、２００８年から引き続き参加したのは９店舗である。また、五月祭のいち企画として、堀田屋旅館１階の土間で、居酒屋を営業した。ビール以外は地産メニューを提供する。

実行プロセス―２００８　まちづくり実験

栄町通りを中心とした飲食店、栄町商工振興会（Ｂ団体)、市プロジェクトチーム、ＵＤＣＴによって実施される。

ＵＤＣＴがまちづくり実験の企画で、地元からの提案の募集を行う。そこで、「三店でほろ酔いセット（お酒とおつまみのセット、１０００円）をしたい」という新企画が、Ｂ団体より提案される。三店ではなく、店舗数を増やすことをＵＤＣＴより提案し、Ｂ団体からは、お酒とおつまみ以外のセットとして子ども向けのデザートセットと、飲食店以外の店舗も参加できるよう、飲む以外の食材の提供を提案した。実現はされなかったが、地元から「スタンプラリーで集めたら１店タダ」（第１２回まちづくり実験実行委員会）など企画を改善する提案も上がる。県職員より、マップをつくるべきという提案がなされ、ＵＤＣＴがマップ作成を行う。

協力店舗は、公募ではなく、呼びかけで行われた。Ｂ団体、商工会、市プロジェクトチーム、ＵＤＣＴが手わけをして行った。商工会職員がまちづくり実験実行委員会（第１０回）に一度参加しており、委員会後、店舗への声かけを行った。参加店舗の呼びかけによって、参加した店舗もある。閉店していたお店を期間中だけオープンさせた店が、赤ちょうちんを買うなど、自主的な取り組みもあった。

広報はＵＤＣＴが新聞折込チラシの配布（船引）を行った（２００８年１１月１日)。片面が味自慢のマップで、片面でまちづくり実験全体の告知を行う。案内文書も作成し、回覧板にも掲示する。市プロジェクトチームが、案内文書を公民館へ配布する。また、ＵＤＣＴのＨＰでも告知を行う。

シンポジウム参加者へアンケートが行われた。また、協力店舗全てにアンケートを実施している。実験後に、感想や改善案を話す場として、第２回シンポジウムが開かれた（２００９年1月２９日)。味自慢のために集まったということはなかった。

実行プロセス―２００９　まちづくり実験以降

まちづくり実験での実施を通して、継続出来る事業として支援する目的で、市が予算措置を行う（田村百景には３０万円、味自慢には、２０万円、その他の事業として２０万円)。ＵＤＣＴより、五月祭の企画の中で味自慢をやることを栄町商工振興会に提案する。

船引中心地区の飲食店、Ｂ団体、区長、市プロジェクトチーム、ＵＤＣＴを中心に実施

される。

「店舗数を増やそう」「地元の味をアピールしよう」ということを、ＵＤＣＴが提案する。店舗数を増やす方法として、栄町区長の提案で公募を行う。公募によって１店舗が参加する。また、昨年と同じ店舗に加え、五月祭打合せ参加者の行きつけや近隣の店舗に直接声がけを行った。意欲ある店舗からは協力希望が出て、結果的に参加店舗数が若干増え、範囲も拡大した。今回は、広告費用として、１店舗３０００円を参加費とした。

五月祭

２００９年５月１日～３日（一部企画は４月２９日～５月３日）にだるま市に合わせて開催。栄町区長の呼びかけで始まり、主催はＢ団体である。森公園（駅前公園）でこいのぼりをあげるイベントが中心で、企画を行った区長は、文化住宅になってこいのぼりを立てるところがなくなったがしきたりを残したいという目的で、こいのぼりの企画を提案した。３～４回回覧板で募集するなどして、８０匹が集まった。栄町以外からもこいのぼりを提供したいという人もいた。柱設置のために、田村市役所に交渉し、５０万円の補助が出ている。区長はこのイベントを栄町のシンボルにしたいと考えている。また、イベントを続けることで、駅前整備をしたいとも考えている。「こいのぼりはどこよりも早く上げたい」との意気込みも聞かれた。イベントをする際には、「目的や方法を区長・隣組に伝えて、お金をかけないといけないが、初めから建物を建てた、ではいけない。(やっているうちに)やるならオレもやってみようかなという人が出てくる。」と述べている。

五月祭での田村味自慢の協力店舗の呼びかけはＢ団体、栄町区長、市プロジェクトチーム、ＵＤＣＴによって行われる。Ｂ団体では、参加店舗への声かけに人手が足りず、ＵＤＣＴや市プロジェクトチームによる継続を希望していた。会長が「もう１回やろう」と声をかけて実行することになる。

マップ作成は、２００８年はＵＤＣＴが行った。広報は、市プロジェクトチームが、案内文書を回覧・公民館に配布し、ＵＤＣＴは新聞折込チラシとＨＰによって告知を行う。

五月祭では、船引出身で東京在住のＣ氏が期間限定で堀田屋（旅館）で居酒屋を行う。

堀田屋は栄町通りにあり、昭和３０年代に建てられた、木造２階建ての旅館である。商店街側（表）と裏手には約１メートルの高低差があり、内部が巧みに処理されている。客間が半階上がったところに設けられ、まちの中心を流れる大滝根川や地域の象徴である片曽根山（通称田村富士）が見渡せる。客室と客室の間はふすまであったり、旅館用途とし

ては、利用対象者が限定されるが、１階部分には土間の食堂があり、懐古的な魅力をもつ建物である。

Ｃ氏は映像業界で仕事をしており、「田村市は情報発信をしていない」という問題意識があり、田村を紹介する情報発信ムービーサイト（alltamura.tv）を運営している。

堀田屋の活用について、Ｃ氏は以下のように語っている。

「堀田屋の１階の食堂部分は昭和の香りがする。かき氷を食べていた記憶がある。今はシャッターが閉まったが、開けたいと思っていた。知り合いが店舗を探している時に堀田屋がいいのではと勧めたが、しぶすぎると言われた。

五月祭をやると聞いて、Ｂ団体がどんな形でやるのか自分の目で見ないとと思っていた。２００８年に飲み会に参加して、ノリでやりますと言ってしまった。小さい時から友人と、動画を流しながら、居酒屋をした。

仕事が入っていたが、仕入から家賃まで１０万円くらいかけてやった。埼玉から友人家族が来たり、東京からカップルが来たり、名古屋からわざわざに来てくれた人もいた。要は情報提供、宣伝であると感じた。郡山で本物の焼き鳥屋をしている友達がオープンと同時に来た。夜は市の人や知らない人でぷらっとしてる旅人のような人もきた。売上は、１万円強の赤字だったが、２０代後半の女性など、こんな人も来るんだという人がきた。。二度来てくれ人もいて、ニーズはあると思った。自分でやってみないと分からないもんだなーと思った。

おーるたむら in 堀田屋で工夫したことは、ビール以外は全て田村のものを使ったこと。豆腐は、減反政策で米から大豆に転作した堀越の農家の大豆を１００％使った。いわな干しも出したいと思ったが小口じゃだめだと言って断られた。（あそことはもう話もしたくない。）都路のベーコンも置いた。電話でお願いしたら、切り落としのところを安くしてくれた。宗像さんのしいたけは大きくて、その場で火鉢で焼いて食べた。保健所へ届け出の件は堀田屋店主の管理の元に行い、特に気をつけた。また、alltamura.tv のスポンサーにもなっている丸信ラーメンから、冷えてもおいしいチャーシューのスライスをおろしてもらった。玄葉さんのお酒も、３月だったが、安藤米屋にお願いして、限定の小沢の桜という日本酒をとっておいてもらった。（五月祭よりずっと前の）お正月からやると決めていた。本田さんの紹介で、エゴマ油（田村名産）の天ぷらをする予定だったが、協力してくれていたおばちゃんが病気になってしまい、普通の油で天ぷらにした。

来年も遊びや楽しみのノリでしたいと思っている。秋に誘いの電話はあったが、本業が忙しくてできなかった。」

Ｃ氏は以前から堀田屋の活用を検討していたが、船引出身で両親の実家が船引にあるとはいえ、東京に長くいたため、地元の人にとってみれば、ヨソモノに近いだろうということを気にしていた。

「ずっと東京にいたから、何語ってんだというかんじだったが、振興会とＵＤＣＴの会議に参加した。おーるたむら in 堀田屋をしたことで、まちの人からの信用度合は上がったと思う。

今は船引に帰っても１週間位しかいられない。おーるたむら in 堀田屋は、何げなく話して決まったが、会って顔を見せないと信用してもらえないと思っていた。田村の五月祭のネーミングも任せてもらえた。」

と語り、会議での参加、宣言をきっかけに、地元との距離を近づけた。Ｃ氏は、東京在住とはいえ、田村市について強い問題意識を持つ。

「田村市の魅力には、モノと人と観光がある。モノはたいして有名なものはないが、探せばある。観光は滝根のあぶくま洞がある。人についても、おもしろい人たくさんいるはず。

田村の魅力をいかに伝えるかと考えた時、人が素敵から始まって、商品が売れて、観光地になったらいいなと思う。船引のおじさんやおばさんなど、人物が出てる情報を発信したいと思った。まちの現場の生の声を伝える。例えば、饅頭でも、つくってる人が素敵だったら、また買ってみたいと思う。だから、人物にスポットをあてようと考えた。」

この思いから、人物にスポットをあてた、田村紹介ムービーを配信する alltamura.tv の立ち上げを行う。

市民シンポジウム（まちづくり実験）での高校教諭との出会いから、高校生との協働による「田村の魅力発掘発信プロジェクト」も行った。第１弾は、田村のまちづくり紹介で、ＵＤＣＴセンター長北澤猛にインタビューを行っている。

「高校生達をたきつけ、ＵＤＣＴに行くぞ！と田中さんに話して行くことになった。ＵＤＣＴも「いいんじゃないですか」とすぐにＯＫした。先生に打診して、ぶつけ本番で撮

った。」

　またＣ氏は広く積極的に、取材を行っている。

「二地域居住では小野町（隣町）がすごい。東京でイベントをしたり、ふるさと暮らし支援センターをつくっている。本気で田舎暮らしをしたい人は多いから、そのお手伝いをしていた。小野町は、親身に対応している。講演があって、６名の経験者の話があった。交通費だけで田舎暮らしの説明をしてくれる。県が補助金を出して、１泊２日の１万円ツアーで、非常に手厚い。応募して行った。本当に真面目にやってる。途中で、船引出身者とバレたけど。」

　また、Ｃ氏は堀田屋活用に関して、具体的な構想を持っている。この構想案を聞いたＵＤＣＴが、五月祭で田村味自慢をすることを話し、堀田屋一階でやってみることを呼びかけた。

「堀田屋の座敷を各アーティストに割り振ったり、おじいちゃんやおばあちゃんが子どもに話を聞かせたり。世代間交流をする。駅から近いし、チャレンジしても面白いと思っている。１階は夕方から１９時までは中高生の買い食いの場にして、電車を待つまでのたまり場にする。わらじ作りをおじいちゃんが教えたり。そういう場があってもいいかなと思う。シブヤ大学[8]を船引につくりたい。おふくろもそれはやれ、と言っている。おばあちゃんは元気な人が多い。テレビで通販を見てる人を外に引っ張り出す。堀田屋さんは旅館丸ごと貸していいよと言ってくれている。五月祭で自分でやってみようということで、勢いと調査をかねてやった。堀田屋はふたつ返事だった。おじいちゃんとおばあちゃんを有効活用したいと思っている。」

「動画もビデオカメラを使って、誰でも使えるようにしたいと思っている。思い出話もアーカイブスにしたい。戦争の話など、こうだったと話してもらいたい。まちにとっての１つの歴史。シブヤ大学のコーディネーターとして参加している友達がいて、教えてくれた。稲の干し方など、おもしろそうなことが色々ある。竹細工や草の葉でバッタやトンボを作れる人がいる。おもしろい人はいませんかと電話で聞いたりした。」

　仕事をしている映像業界が、インターネットによって仕事がしやすくなり、昔は東京のスタジオで映像や動画の編集をしていたが、今は在宅でできるようになった。今は、東京で撮影して、船引で編集して東京へネットで送って、打ち合わせして、納品をしているが、

8　東京都渋谷区でＮＰＯが運営する団体。社会教育の推進や子どもの健全育成を授業形式で行っている。まちにいる人が先生や、授業のコーディネートを行う。

目途がついたらすぐにでも帰りたいと語っている。

五月祭以降

五月祭以降、地元のイベントに合わせて味自慢をやっていこうという話はあったが、田村味自慢の継続はない。ＵＤＣＴはＢ団体に何回かにわたり実施をもちかけ、チラシ作成等では支援できることを告げ、第２回目の実施結果のアンケートを提示し次回の実施を提案した。Ｂ団体中心では実施できないとの意見であった。既存イベントをするにも人手を集めるのに苦労がかかるため、田村味自慢の企画を牽引することはできないという声が聞かれた。

まちづくり実験では、各店舗へのお願いはＵＤＣＴを中心に行ったが、Ｂ団体メンバーは「一晩に３～４軒回るのは、大変だと思ったようだ」とメンバーの気持ちの変化を語っている。広告費の３０００円がかかることになったことに対し、１店舗で広告することを思えば低費用だが、期間中に３０００円回収しなければ損、という考えになるため、お願いしづらくなったことも語られた。Ｂ団体は飲食組合による継続を期待している。

一方の飲食組合も、協力はするが、主催ではしにくい状況にある。田村味自慢の実施店舗は組合に関係なく呼びかけているため、飲食組合加入者と非加入者が両方含まれている。組合に入っている店舗からはいくらか組合費を受け取っているため、有利なように取り計らう必要があり、田村味自慢を飲食組合は引率することはしにくい構造となっている。

小結

まちづくり実験以降、２００９年の五月祭で田村味自慢は企画が実現している。しかし、その後は企画の実現には至っていない。

そこに至るまでのＢ団体のプロセスを整理すると、以下である。

Ⅰ　問題意識／やりたいことがある
　栄町商店街の活性化、田村味自慢（ほろ酔いセット）
Ⅱ　提案する場があった
　まちづくり実験
Ⅲ　他主体との関係性があり実行した
　Ｂ団体内の結束、参加希望店舗、市ＰＴ、ＵＤＣＴ

Ⅳ　他主体との関係性を構築できなかった

Ｂ団体の人手不足、新たな協力者の否出現、ＵＤＣＴが求めることとの不破

田村味自慢ののれんを同じくして、独自に企画を実現させたものもある。
そこに至るまでのＣ氏のプロセスを整理すると、以下である。

Ⅰ　問題意識／やりたいことがある

堀田屋旅館の活用、田村の情報発信

Ⅱ　提案する場があった

飲み会に参加して、ノリでやりますと言ったこと

Ⅲ　他主体との関係性があり実行した

堀田屋店主、地元の友人、alltamura.tv スポンサー、農家、ハム工房都路、安藤米屋（地産の食材を求め積極的な働きかけ）、市ＰＴ、ＵＤＣＴ

2. 田村味自慢　まちづくり実験とその後のプロセス比較

まちづくり実験

種類			企画1	企画1-1	企画1-2	企画1-3		企画1-4	準備		準備	準備	実施	評価
意志・課題	まちづくり実験をします！	地元で何かしませんか？	ほろ酔いセットを3店でしたい	店舗数を増やそう	飲む以外の食材や子供向けもつくろう	マップを作ろう		アンケート集計しよう	協力店集めよう	協力するよ	マップ作成	お客を呼ぼう	味自慢開催	アンケート実施
働きかけ・実施主体		■振興会	■振興会	■振興会	■振興会			■協力各店	振興会■	■6店	■協力店		協力各店	■振興会
									商工会■	■1店				
						■県				■2店				
										■2店				
										■1店				
									市PT ■			市PT		
	UDCT	■UDCT	■UDCT	■振興会	■UDCT	■UDCT		■UDCT	UDCT■		■UDCT	UDCT		■UDCT

マップ代（UDCT）　　チラシ代（UDCT）

五月祭　2009年5月

種類		企画1	企画1-1		企画1-2	企画1-3	企画1-4	準備		準備	準備	実施	評価
意志・課題		五月祭で味自慢をしませんか	店舗数を増やそう		地元の味をアピールしよう	協力店に公募をかけよう	アンケート集計しよう	協力店集めよう	協力するよ	マップ作成	お客を呼ぼう	味自慢開催	アンケート実施
働きかけ・実施主体		■振興会	■振興会		■振興会		■協力各店	振興会■	■4店			協力各店	
								区長 ■	■1店				
						■区長			■4店				
									■3店				
									■1店				
								市PT ■			市PT		
		■UDCT	■UDCT		■UDCT	■UDCT	■UDCT	UDCT■		UDCT	UDCT		UDCT

チラシ代（UDCT）

五月祭以降

種類		
意志・課題		また味自慢しませんか？
働きかけ・実施主体		■振興会
		■UDCT

3-2-3. 快適街路実験

内容－２００８　まちづくり実験

道路に面した空地に、プランターなどの植栽を置いたり、ベンチの置き方を工夫することで、溜まれる場をつくろうとした。２００９年１１月１５日・１６日に実施。

目的は以下である。
①目的の商店に車でアクセスするのではなく、歩いてアクセスするのに適していて、かつ歩きたくなるような通り空間を形成したい。結果、賑わい創出につながり、商店街が活性化するのではと考えた。
②沿道の空き地や駐車場の新しい利活用方法を、実際に実験して可能性を探ること。

通り沿いの住民が所有しているプランターなどの植栽を通りに出す。また、遠藤の壁面にプランターを設置した。また、プランターの設置に伴い、通り沿いの清掃を行った。

いつもは店内のみで営業をする店舗が、オープンカフェを行った。１店は、普段は駐車場に使用しているスペースに椅子とテーブルを用意し、営業を行った。１店は、軒先に広いスペースがあるわけではないが、オーニング（建物の軒先についているロールスクリーンのような屋根）を設置し、空間をつくった。

ベンチの配置位置を工夫した。振興会が所有しているベンチは、地元高校生によって、白に塗装された。また、通りにフラッグを設置した。

シンポジウム参加者へのアンケート（３０名）では、「どちらでもない」（１２名）が多く、続いて「とてもよかった」（８名）、「よかった」（８名）だった。「明るくなった」という意見がある一方、改善点として、「オープンカフェはもう少し暖かい時期に実験すれば良い」という意見もあった。「分からなかった」という意見もあり、上記の「どちらでもない」という印象になっていると推測される。

内容－２００９　まちづくり実験以降

田村市中心市街地まちづくり基本計画の検討報告書では、快適街路実験の改善案として、「オープンスペースの活用（地域循環産業　直売市場）」「アイレベル～建物２階レベルの高さへの植栽」「地元の自主的な取り組み・工夫」が記されている。

実行プロセス―２００８　まちづくり実験

これは栄町通りの店舗、近隣住宅、栄町商工振興会、栄町若連会、福島県（福島県県中建設事務所）、地元コンサルタント会社、市プロジェクトチーム、ＵＤＣＴによって運営される。

商店街の人通りが少ないことを憂慮していた栄町商工振興課（Ｄ団体）の有志によって企画された。栄町区長も企画に参加し、議論を行った。元々は一方通行化の社会実験を行う予定だったが、地元の反対があり企画を縮小し、通り沿いでできることをしようという企画になった。第７回まちづくり実験実行委員会より、一方通行化の社会実験に代わって、快適街路実験が検討される。地元での自主的な取り組みでできる空間づくりについて、第１２回まちづくり実験実行委員会で研究室学生より提案が行われる。

その企画について、ＵＤＣＴが、Ｄ団体に主体的に実施してほしいと呼びかけるが、Ｄ団体はイルミネーション（地元イベント）で忙しく、企画を研究室から提案することになる。研究室が実行するにあたっての協力を振興会がするということで進めた。まちづくり実験実行委員会にて検討がなされ、第１２回まちづくり実験実行委員会では、学生から提案し、出席者全員で実際に通りを歩きながら確認する。

冬場の実施だったため、Ｄ団体メンバーの中には、実験を危惧するものもいたが、「いいからやってみっぺ」という会長の一言で、実施される。

栄町区長が「オレンジ色の提灯を５００個つるす」（第１１回まちづくり実験実行委員会）と提案し、市プロジェクトチームがホームセンター等で見積もりを行うが、多数の入手が困難であったため、栄町区長の呼びかけで、商工会若連会が「祭」の旗を外灯につるす。

ベンチはＤ団体が準備し、ＵＤＣＴが高校に働きかけ、生徒がボランティアでベンチの塗装を行う。また、Ｄ団体が近隣に呼びかけて、それぞれの店舗や家にある鉢・プランターを沿道に並べるよう協力を仰いでいる。

Ｄ団体のメンバーはさらに自主的に動き、竹を切り出して作った鉢植鉢に花を飾った。

広報は 11 月のシンポジウムで告知した他、チラシ（実験全体）を配布する。実験後に、感想や改善案を話す場として、第２回シンポジウムが開かれた（２００９年１月２９日）。

実行プロセス―２００９　まちづくり実験以降

「来年度春に一方通行・通行止めも検討して、交通社会実験を行う」（第７回まちづくり実験実行委員会）とあるが、実現には至っていない。

快適街路実験については、Ｄ団体メンバーより、「反省会をしたかった」「設備も購入したが、その後ＵＤＣＴからフォローがなかった」という声が聞かれた。

小結

地元発の企画であり、実施にあたって非常に協力的だったにもかかかわらず、まちづくり実験以降継続していない。

そこに至るまでのＤ団体のプロセスを整理すると、以下である。

Ⅰ　問題意識／やりたいことがある

駅前通りの交通量の増幅、一方通行化の社会実験

Ⅱ　提案する場があった

まちづくり実験

Ⅲ　他主体との関係性があり実行した

Ｄ団体内、近隣、市ＰＴ、ＵＤＣＴ

Ⅳ　他主体との関係性を構築できなかった

研究室学生、ＵＤＣＴ等との改善案についての議論なし

3. 快適街路実験　まちづくり実験とその後のプロセス比較

まちづくり実験

種類		企画1	企画1-1	企画1-2	企画1-3	企画1-4	準備		準備	実施	評価	評価
意志・課題	まちづくり実験をします	快適街路実験をします	竹で鉢をつくろう	旗をかけよう	ベンチの置き方を変えよう	ベンチを白く塗ろう	周辺の協力を得よう	協力します	お客を呼ぼう	実施	協力店へのアンケート	シンポジウム参加者へのアンケート
働きかけ・実施主体			振興会				振興会	■2店		協力各店		
				■区長			区長	■近隣		近隣		
										振興会		
				■栄町若連会		■高校				栄町若連会		
										県		
										コンサル		
		学生			学生					市PT	学生	
	UDCT	UDCT				■UDCT	UDCT？		UDCT	UDCT		UDCT

プランター・ベンチ代（UDCT）　　装置代（UDCT）

まちづくり実験以降

種類	
意志・課題	
働きかけ・実施主体	

3-2-4. イルミネーション

内容－２００８　まちづくり実験

イルミネーションは、２００６年より栄町商工振興会（Ｅ団体）によって行われてきた集客イベントの１つである。冬季に手作りの街灯を飾る取り組みである。周辺地区では、移地区、大越地区においても盛んにイルミネーションの飾りつけが行われている。

まちづくり実験期間中の２００８年１２月１日に点灯式が行われる。

目的は以下である。
①例年Ｅ団体により行われているイルミネーションの実施範囲を広げる。
②将来的には、定期的なイベントとして定着させる。

ＴＭＯまちづくりふねひきの駅前イルミネーションの点灯を同時に行う。また、イルミネーションの点灯式に合わせ、地元高校のよさこい、吹奏楽の演奏が行われる。例年行われていた抽選会は、商工会から場所を変えてＵＤＣＴにて行われた。

シンポジウム参加者へのアンケート（１９名）では、「良かった」「どちらでもない」（各８名）という意見が多かった。「町内が明るくなるので良い」という声がある一方、「オリジナルなイルミネーションをしてほしい」という声が上がった。

内容－２００９　まちづくり実験以降

田村市中心市街地まちづくり基本計画の検討報告書では、イルミネーションの改善案として、「お祭りやイベントの合同・連携」「高校との連携」が記されている。また、「準備片付け作業には、中心となる４～５人程度であったが、今回は、地元の商店主が３５人程度

集まって作業を行った」ことを特筆している。

２００８年に引き続き、イルミネーションの設置及び点灯式（２００９年１２月７日）が行われる。設置・運営はＥ団体が行う。今回はイルミネーションを１０本増やし、ＪＴ跡地での飾りを工夫した。１５名の各地区連絡員が連絡をし、２００９年も３５名程度が取りつけに参加した。こういった活動を美容院が参加しやすい月曜日に行うようにし、美容院からの参加が増えた。郡山信用金庫からの参加もある。抽選会はＵＤＣＴにて行われ、点灯式の司会は２００８年に引き続きＵＤＣＴスタッフが行う。

実行プロセス―２００８　まちづくり実験

イルミネーションの取り組みは、最初はＥ団体の４～５人の集まりから始まった。「何かしなければ」という思いで始まった。設置器具を購入するとお金がかかるため、「自分たちでやろう」という話になり、取り付ける木を伐採して、イルミネーションを手作りしている。田村市から毎年３分の２の補助金を受けている。

まちづくり実験実行委員会で、「栄町イルミネーション点灯式を社会実験に併せて行えないか」という提案が地元からなされる。当初ＵＤＣＴは、既存企画以外の地元からの提案を望んでいたが、地元からの提案を受け入れる形で始まった。

ＵＤＣＴスタッフの呼びかけで、企画内容について話し合うことになる。この時、船引高校が参加しているが、これは元々は船引高校からの働きかけによるものである。ＵＤＣＴスタッフが高校に、ＵＤＣＴやまちづくり実験（念頭にあったのは空き店舗活用やペイント）の説明に行った時に、学校関係者より、「よさこいや吹奏楽もできるので、イベントがあれば協力できます。」という話を聞いたことがきっかけである。その後、ＵＤＣＴスタッフがＥ団体メンバーにその旨を伝え、イルミネーションを実施に移す段階で、Ｅ団体からの要望としてまちづくり実験実行委員会で意見が出た。

前年までは、ＪＴ跡地でのＥ団体の点灯式と、駅前でのＴＭＯまちづくりふねひきの点灯式は別々に行われていた。まちづくり実験実行委員会で、Ｅ団体会長以外のメンバーより、同時開催が提案される。市プロジェクトチームメンバーが、知り合いだったＴＭＯまちづくりふねひきの関係者とＥ団体のイベントとの日程調整を行い、最終的にＥ団体会長がＴＭＯまちづくりふねひきの点灯者へ依頼する形で実現した。

広報は、Ｅ団体が、イルミネーション点灯式にかけて例年行う大売出し抽選会の新聞折込チラシ（田村市全域）に、点灯式と高校生による演奏・演舞について記載している。Ｕ

ＤＣＴスタッフは実施案内文書を各行政局、教育委員会、学校、公民館、マスコミ（ＮＨＫ、日経新聞、福島民報新聞、福島民友新聞等）に配布し、ＵＤＣＴのホームページにて告知を行った。

Ｅ団体の運営補助として、ＵＤＣＴと市プロジェクトメンバーは、抽選会の会場提供、設営準備、高校生（演奏・よさこい）の控え室（現在のレガーメ）の準備（イス・暖房）、音響（スピーカー・マイクなど）のセッティング、夜間照明の手配、司会（ＵＤＣＴスタッフ）を行った。夜間照明の手配は、地元建設会社の有志による協力があった。また、高校生がよさこいに必要なハッピ代の負担を行っている。

実験後に、感想や改善案を話す場として、第２回シンポジウムが開かれた（２００９年１月２９日）。

実行プロセス―２００９　まちづくり実験以降

Ｅ団体、市、ＵＤＣＴからイルミネーションを続けたいという意見があったが、２００８年度内は動きはなかったが、２００９年度の点灯式の日程を調整し始めたころに、高校生の参加、Ｅ団体とＴＭＯまちづくりふねひきとの協働、ＵＤＣＴとの協働について話した。

ＵＤＣＴは、「資金的な支援（チラシ代負担等）はできるが、人的支援はそれほどできない。Ｅ団体からは、足湯をしてほしいというアイデアが出たが、実現はしなかった。少なくとも去年やったことは地元で主体的にやってみてはどうか」という話をＥ団体に投げかける。その背景には、滝根・大越の業務もあり、ＵＤＣＴがいつまでも中心で動いていても続かない、という思いがあったようである。

ＵＤＣＴスタッフと一緒に高校へお願いに行くことを提案したが、Ｅ団体はイルミネーションの設置だけで手一杯であること、ハッピ代等お金がかかるのでＥ団体では負担できないこと、去年はＵＤＣＴがやっていたから乗っていたけれどＥ団体主体ではできない（「振興会は営利組織の集まりだから、高校にお願いするような場合は、市かＵＤＣＴが間に入らないとだめだ」）等の意見が出たことから実現しなかった。Ｅ団体は、ＴＭＯまちづくりふねひきとの日程調整をしたいという意欲はあったが、自分たちがするのではなく、その仲介をＵＤＣＴにしてほしいという思いがあった。

Ｅ団体からは、足湯をしてほしいという提案が出たが、実現には至らなかった。また、Ｅ団体からの依頼で、ＵＤＣＴスタッフは点灯式の司会を、去年に引き続き行った。

小結

既存イベントを発展させる企画であったが、実験後は、発展させる企画は実現されず、元の姿に戻った。

そこに至るまでのＥ団体のプロセスを整理すると、以下である。

Ⅰ　問題意識／やりたいことがある

他団体との共同点灯式、高校生の地元イベント参加

Ⅱ　提案する場があった

まちづくり実験

Ⅲ　他主体との関係性があり実行した

市ＰＴ、ＵＤＣＴ

Ⅳ　他主体との関係性を構築できなかった

高校、ＴＭＯまちづくりふねひきとの関係性なし

4. イルミネーション　まちづくり実験とその後のプロセス比較

まちづくり実験

種類		企画1	企画1-1	企画1-2	企画1-3	準備	準備	実施	評価
意志・課題	まちづくり実験をします	実験にあわせて恒例のイルミネーションを工夫します	高校生のイベントをしよう	TMOと共同開催しよう	範囲の拡大	主催者が合意しよう	お客を呼ぼう	実施	シンポジウム参加者へのアンケート
働きかけ・実施主体		■振興会	■振興会	■振興会	振興会	■振興会	振興会	振興会	
						■TMO		TMO	
								地元建設会社	
			①高校	■高校				高校	
						■市PT		市PT	
	UDCT	■UDCT	■UDCT				UDCT	UDCT	UDCT
			はっぴ代(UDCT)				新聞折込チラシ代(UDCT)		

まちづくり実験

種類		企画2		企画2-1		準備	実施
意志・課題		イルミネーションをします		範囲の拡大		お客を呼ぼう	実施
働きかけ・実施主体		振興会		振興会		振興会	■振興会
							■UDCT(抽選会場・司会)

3-2-5. 空き店舗による市民活動展

内容－２００８　まちづくり実験

栄町商店街の空き店舗を５軒を借り上げ、簡単な改装（不要物撤去・清掃・塗装等）をした上で、３か月間、利用希望者に無償（光熱費別）での貸出を行った（空き店舗仲介システム)。借り上げはＵＤＣＴが行った。

目的は以下が示されている。
①長年使用されていない空き店舗を使える状態にする。
②一定期間家賃は無償で活用することで、空き店舗利用促進のきっかけとする。
③地元で活発な市民活動の発表の場として利用する。市民活動による活用でにぎわいを取り戻すことで、相乗的な利用を促す。
④中長期的には、空き店舗を利用促進するための方策として、市・商工会の空き店舗活用に関する事業の紹介、県や国の支援制度紹介や情報提供を行う。

まちづくり実験期間中の２００９年１１月１日から改装を行い、２００９年１１月１５日から始まり、３ヶ月間行われる。５つの空き店舗では、多彩な活動がなされる（田村市大越町出身のイラストレーター、都路の竹工芸炭都美、版画家、菅谷を明るく元気にする会、高校生、船引町ボランティア会、横浜を拠点に活動をしているアーティスト)。

実験０１の会場

①旧氏家薬局

内装・外壁側面は高校生がペイントを行い、内壁面の破損個所は、建設業組合を通して、鈴船建設が修復を行った。

ここでは、船引高校と船引町ボランティア会が活動を行う。船引高校は高校生部活動スペースとして利用した。管理上、活動はＵＤＣＴが開いている時間帯に限った。１２月１日のイルミネーション点灯式では、吹奏楽部・よさこい演舞者の待合兼練習スペースとなる。その後、美術部の作品展示が行われた。

１２月・１月は船引町ボランティア会によって、書や写真、押し花、手芸作品、彫刻などの展示が行われた。ＵＤＣＴが休館している日曜日には、船引町ボランティア会によって店舗の管理が行われる。

②旧福田毛糸店

内装は、建設業組合を通して、田村産業が行う。外壁・テントの塗装は、まちづくり実験（まちなみペイント）で高校生が行う。

ここでは、「菅谷を明るく元気にする会」によって、地元の特産品や市民活動の作品展示が行われる。平日は仕事をしているメンバーが多いため、期間中は、日曜日・祝日・イベント開催日に店舗を開ける。「古里交流館」と自筆の看板も設置された。

③旧愛知パチンコ屋

空き店舗になってから２５年が経ち、老朽化が進行していた。内装は、建設業組合を通して、武藤工務店が行った。外壁は、まちづくり実験（まちなみペイント）で高校生が行

う。

ここでは、船引町を拠点とする版画家と横浜を拠点とするアーティストが活動を行う。版画家である吉田正市氏は作品の展示・販売を行う（２００９年１１月１４日～１６日）。管理は出店者自らが行う。

アーティストのヤング荘は、インスタレーションを行う。映像作品を壁面に投影し、通りから店内を覗いてみる、という展示を行った。映像は、ヤング荘が船引滞在中に開催したワークショップの風景をまとめたものである。

④旧安田屋（菓子店）

空き店舗となってから８年経っていた。所有者が内部の整理・清掃を行う。内部の片付けの一部は、船引高校のボランティアが行った。内装の改装は特に行っていない。外部が一部破損していたため、鈴船建設が修復を行う。

ここは、田村市都路町の竹炭工都美が店舗として活用する。竹炭の体験制作・展示・販売を行う。都美さん自らのホームページで告知も行う。管理は出店者自ら行う。期間中は毎日お店を開け、毎週水曜日に体験制作を開催した。

⑤旧銀河工房（作業所）

実験直前まで使用されていたため、当初は参加しない予定だったが、建物所有者がまちづくり実験に賛同したため実現した。１１月に前使用者が移転したため１２月より実験に参加した。

ここは、大越を拠点とするイラストレーターが、ギャラリーとして使用する。内装の改修や展示は、出展者自らが行う。１月１５日～１月２９日に展示を開催し、自らチラシを

近隣や知り合いに配布し、また展覧会用のブログも立ち上げる。新聞やラジオなどもメディアにも自ら声をかけ、取り上げられる。郡山や仙台からも来訪者がある。通りがけの方も明かりがついているからということで、入ってくる。

田村市紹介ネットTV主宰者がＵＤＣＴにて紹介ビデオ作成講座を開く。当初空き店舗の利用を希望していたが、インターネット環境がなかったため、ＵＤＣＴで活動し、「田村の魅力発掘・発信プロジェクト」を企画する。

また、フラワーセンター松江（空き店舗）はまちづくり実験の趣旨に賛同し、花屋を期間限定で再開することになっていたが、都合がつかず、実現には至らなかった。

シンポジウム参加者へのアンケート（５７名）では、「よかった」が２５人と最も多く、「どちらでもない」が１８人、「とてもよかった」が９人と続いた。「発表の場があることはいい」という意見がある一方、「案内が足りない」、「どこにでもある印象だった」という意見もあった。まちづくり実験以前から、報告書で空き店舗問題が指摘されていたが、実験によって栄町商店街の空き店舗への需要状況が明らかとなった。

内容－２００９　まちづくり実験以降

田村市中心市街地まちづくり基本計画の検討報告書では、空き店舗による市民活動展の改善案として、「ショーウィンドウなどに展示できる強力店舗の連携」「空き店舗や空き地を利用した展示・発表スペースの充実」「既存の魅力ある店舗や場所をつなぐイベント・マップづくり・情報発信」「文化遺産の記録（歴史文化遺産のリスト化）」「アトリエやカフェを開くきっかけ（駅の近くに集まって住む）」「家賃やオーナー、建物の状態、周囲の状況把握」「ホームページなどによる情報提供」「市・商工会の家賃補助制度の紹介」「ＪＴ跡地を駐車場として暫定活用（既存ストックの活用）」が記されている。

大越町出身のイラストレーターが自費で入居を続けている（２００９年２月１日～２０１０年１月３１日までの１年契約）。創作活動を行うアトリエとして利用している。１２月

現在は全く行っていないが、週３日程利用していた。

また、実験には参加しなかったが、カフェを経営する店舗を探していた船引出身の若い夫婦が空き店舗の活用を聞きつけ、実験によって改装が行われた店舗でカフェ「レガーメ」をオープンした。レガーメとイラストレーターは「自分たちで人を呼ぼう」と共鳴し、イラストレーターの作品を展示した個展がレガーメで開かれた。

空き店舗仲介システムの継続はない。しかし、ＵＤＣＴに数軒の空き店舗利用希望者からの問い合わせがあり、１軒は事務所兼倉庫として実際に利用されている。ＵＤＣＴの取り組みとしては、実験参加者の意見を反映して、出展希望者が常駐しなくても展示が行える企画として、２００９年１０月末にまちなか文化祭（ミュージアムストリート）を行う。

実行プロセス―２００８　まちづくり実験

空き店舗を期間限定で無料で貸し出すという企画は、研究室とＵＤＣＴから提案された。まちづくり実験実行委員会では、活発な意見交換があり、「審査基準をつくるべき」ということが栄町商工振興会から提案された。これは、びっくり市（栄町商店街で長く続くイベント）等の経験から、暴力団の参入などの話もあり、その経験から意見が出されたようである。「火災保険に入る必要がある」「ＵＤＣＴが賃貸者となって、空き店舗利用者と転貸契約を結ぶのがいい」ということを市プロジェクトメンバーが提案したり、「利用者に企画書を書いてもらう」ということを県職員が提案し、「企画書の体裁について、目的がはっきりしない」との助言も行っている。提案に対しては、ＵＤＣＴが動き、審査基準を作成し、契約書の作成を行った。

この取組では、空き店舗所有者の了解が必要だったため、栄町商工振興会と市プロジェクトチーム、ＵＤＣＴが仲介を行った。うち一店舗は、近年行政との協力体制が見られなかった地主であり、この店舗の活用が課題視されていたが、栄町商工振興会の会長が建物所有者と顔を合わす機会があり、その折に声をかけ、利用が可能となった。一店舗は、市職員ＯＢが所有者だったので、市から声をかけやすかったようである。

利用者の発掘にあたっては、市プロジェクトチームとＵＤＣＴの呼びかけが行われ、５人（団体）が参加した。地元は店舗利用者の仲介を行わなかったが、店舗利用者についての意見は出している（「フライフィッシングのフライ展示は、お店をもっているので、夜間で短期間ならお願いできるかもしれない」「きのこ鑑定教室は開催できる」（第２回まちづくり実験実行委員会））。まちづくり実験実行委員会では各々ができることを出し合って、栄町商工振興会、市職員、ＵＤＣＴの役割分担が行われていたようである。

市プロジェクトチームは、田村市船引町で竹炭工房をしている吉田氏、高校、ボランティア会に声をかけた。ＵＤＣＴは田村市滝根町のまちづくり団体、横浜を拠点に活動するアーティストに声をかけた。その一方で、栄町区長から、利用者を公募しようという発案があり、「回覧で空き店舗に何を入れるべきかアンケートをとる」（第５回まちづくり実験実行委員会）と提案されている。回覧によるアンケートは実施しなかったが、ＵＤＣＴが新聞折込チラシ（２００８年１１月１日付の新聞折込チラシ）にて募集を行ったところ、田村市大越町のイラストレーターや、船引町の版画家や、地元の情報を発信するネットＴＶの経営者が集まった。実験後、空き店舗（旧銀河工房）にてカフェを始めたオーナーは、物件探しで船引町の不動産屋に行った際、「空き店舗はいま利用されてるから、ＵＤＣＴに行って聞いてみて」ということで、空き店舗による市民活動展のことを知る。

広報では、ＵＤＣＴがＨＰで告知したほか、新聞折込チラシ（田村市全域）でもイベントのアピールを行った。

また、期間中に来場者数が芳しくなかったことから、店舗利用者（実験参加者）で集まって、課題について話し合っている。この会を開くことを呼びかけたのは栄町区長で、区長がＵＤＣＴへ依頼し、ＵＤＣＴにてミーティングを行った。ただ店舗を開いているだけではなく、何か合同でイベントなどをしないと人は来ない、高校生にもっと関わり続けてもらえるような取組が必要ということで、２００８年１２月２日、１２月１１日、１２月２２日の全３回開かれる。栄町商工振興会会長、栄町区長、空き店舗利用者（竹炭工房都美（Ｆ氏）、菅谷を元気にする会、船引高校教頭・生徒、市職員、ＵＤＣＴ等が参加した。

「継続的な地元と高校生の交流の場をつくるために」という目的で、船引高校生との一過性に終わらない協働の在り方について、話し合いがなされている。

具体的な案として、

①美術部・華道部などの部活動スペースにする。その為に、地元の人で夕方２時間だけ居てもらえないか。もしくは、ボランティア協会の人にお願いする。

②定期的な読み聞かせの会を開く。船引の子供たち・お母さんたちを集めて、一度開催してみる。

③美術部がシャッターのペイントをする。図案の作成を地元の人と共有しながら実施する。

④高校生によるまちのリサーチ、歴史を調べる。栄町商店街の人から昔の写真を出してもらい、昔の話を聞く。情報や写真を収集して、まとめて展示する。

⑤高校生がアーティストと協働する。ワークショップなど。空き店舗で展示を予定している大越出身アーティストと一緒に作品を製作してみる。その後、地元のいろんなアーテ

ィストの方と継続的にワークショップを行い、発表する。
⑥高校生による地元農産物販売。
⑦空き店舗をサテライト教室として利用。市と高校（県）の協力が必要。
が提案されている（第２回）。

その他、駐車場の問題や、船引中学校との連携についても話し合いがなされている。来年度の予算獲得方法を今から検討することも、Ｆ氏から提案されており、具体的な補助金メニューも示されている。上記の具体的提案について、Ｆ氏を中心に意見が出されたが、実行には至らなかった。

Ｆ氏は、田村市都路町で、竹炭工房都美を営む。船引では、スーパーでの展示・物販会に出店した経験はあるが、まちづくりに関わるのは初めてであった。

公募の広告で空き店舗による市民活動展を知る。また、市プロジェクトチームメンバーがＦ氏と以前からの知り合いだったため、声をかける。Ｆ氏は地元都路のまちづくりに積極的で、火祭りというイベントの企画・運営などを行っている。

「（都路が船引他と）合併して（田村市になって）、地名が変わるという話があった。都路は都路村だった。周りは町だった。名前だけ町になっても、元々村のようなところだから変だと話したが、町になりましょうとなった。今思えば、唯一村で残るチャンスだったが。

都路という名前がなくなるという話もあった。名前をなくされちゃ困る、何かのかたちで残したいと始まったのが、“都路　火祭り”。イベントで名前を残そうとした。結局名前も残ったが。村のほうが合ってましたね、と最近言われる。町になったことは本当に後悔している。村に戻れる話もある。村のほうが地域像が見える。昔ながらの、といったような。」

Ｆ氏の根底には熱い思いがある。

「イベントは打ち上げ花火だから、要は、イベントはきっかけで、新しい動きがあればいいなというもの。

地域の活力がないと、住んでる人の自信がなくなる。
誇りや自信が下がる。せめてイベントでも賑わって、やる気になればできるということを示す。船引は田村市の中心地で賑わいがあるところなのに、自信がない。商店街の人も

自分の代までだと言って、自信がないところが悲しいところ。私は地域づくりは、誇りを持つようになるかだと思っている。

東京が一番いいんだという意識があるが、東京のごちゃごちゃよりここがいいと思える。東京に目がいくと、地元に自信がなくなる。都路にはコンビニがない。でも十分暮らせる。コンビニがないからいんだと誇り・自信を持つ。他にはないということをやって、つくりだしていく。

都路は（田村市の）他の地域と比較して、一番ダメな地域と思われている。都路が出身だと恥ずかしいと言う人はいっぱいいる。若い時はそう。なんでこんな地域なんだろうというが、外に向かってバカにするなと言いたい。」

火祭りは民間融資を中心に、行政局を巻き込んで行われている。仲間に現役の市役所職員がいて、窓口業務の経験を生かし、県への申請の役割を果たしている。行政と民間の間が近く、人と話しやすい雰囲気があるという。

「若いころは何がやりたいのかカラ回りしていた。好き勝手にやってると言われていた。これから１０年だなと思っている。いま５２歳。自分の意見も本当に話せば聞いてもらえるようになった。本当にやりたいときは行政にお願いする。船引では私は第三者だが、都路でやる時は第三者ではないので、行政にもっと積極的になる。」

火祭りは８月の第一土曜日に行われているが、２０１０年ははさらに盛大にする予定で、東京からバスを仕立てる計画もある。２００９年には、都路伝統をつくる会という東京の団体からお金を出して、東京からバスで来れるようにした。

栄町商店街での空き店舗利用については、

「空き店舗になる経緯もあっただろうから、簡単に売れたり、人が集まることは期待していなかった。」

と話している。
一方でＦ氏は、“まちづくり実験に行って店を開けることについての参加する意味合い”について、内部で打ち合わせを行って以下のようなことを検討している。

「工房で竹炭を使っている。風鈴をつくったり、体験活動に力を入れている。それは、炭のことは一般の人は分っているようで分かっていないから。炭について話しをする場が

元々ない。ムリに伝えるより、自然に伝えられるものとして、一般と接する機会があればいいということで体験活動をしている。小物をつくりながら、レクチャーして、流れを分かるようにしている。

まちづくり実験は空き店舗の活用だったが、そこを起点にして、界隈で出かけて、公民館や小学校などにも展開できるのではないかと思い、その中心として協力できるのではないかと参加した。周りの協力を得ながら、店で大々的にして、大きめにやれば賑やかになる。」

しかし、空き店舗に参加する前に期待していたこととそのギャップを感じる。

「（上記の話を）発表する場もなかった。地元のみなさんが新しいことをしていこうという期待がなく、残念だった。改めて誘いがあっても、動きがなければ仕方がない。話し合いで地元の反応の鈍さを感じた。できれば盛り上がるようなテーマを出したいが、外部の人がリードする立場となるのは難しい。言いにくい。場はあるが、意見は出しにくい。

今までにない人がきて、新しい動きがでる初動になるのではないかと期待していた。それに対して地元の人も応えて、全体として盛り上がるのではないかと思っていた。ＵＤＣＴでまちづくり実験中に会合をしたが、地元の人は自分たちも何とかしたいと思ってるが、一部の人間だけで、みんなではないと言っていた。」

Ｆ氏は、地域を特化させることが重要だと話す。

「何らかの物を求めて、別なまちにくる。船引は田舎でも、郡山からもモノを買いにくる。船引はものづくりや手づくりのまちがいい。手づくりで何かやってる人がズラッと店舗に入っているイメージ。ものづくりに関するイベントをしたり、ワークショップや体験活動をしたり。すべて“ものづくり”に関わっていくような、コンセプトが必要。船引は界隈から人が来る。町場だから、船引に行くのが当たり前だった。郡山や都会から人を呼ぶくらいので、自信と誇りが必要。

他には、人通りがないので、いくつかのコーナーをつくって、昔遊びをしたらと提案した。ヤング荘がつくったカルタをあの道路でする、など。せっかくカルタがあるので、活用しないともったいない。それよりカルタの中身を募集している。みんなで具体的に話し合ってやって、盛り上がりをつくる動きや流れがほしい。

また、農家の活性化も必要だと話す。

「空き店舗に直売所をつくる。今は品物もないし、人も来ない。直売所は無人でもいい。有人の場合、誰がお店の管理をするかという話になって、動くのに大変になるが。直売所に品物を並べる手数料をとって売る。モノを出すほうも増えて、お客さんも増える。自分のところにないものを買っていく。何がほしいかより、品揃えで人がくる。機械的に置くのではなく、声を聞くことが大切。直売所にお客さんがくれば、あれなかこれないかという声が聞けるようになる。一軒やり方を工夫したら、活気がでるのではないか。」

Ｆ氏の他に、「菅谷を明るく元気にする会」は今回の展示によってネットワークを広げ、地元の機運を高めるとして、度重なる会合を開いて企画を検討した上で参加していた。

実験後に、感想や改善案を話す場として、第２回シンポジウムが開かれた（２００９年１月２９日)。振り返り（評価）は、シンポジウム参加者へのアンケートが行われ、①よかったか否かとコメントの自由記述を行っている。しかし、空き店舗利用者に対して、「どうして実験のことを知ったのか」「期待していたこと」「利用してみてどうだったか」等については、ヒアリングやアンケートによる調査は行われていない。

実行プロセス―２００９　まちづくり実験以降

実験以降、市民の文化活動の発表の場づくりを目的として、空き店舗を一定期間廉価で貸し出しを行う、という取り組み自体はなくなる。ＵＤＣＴは不動産情報が集まっているが、その機能については発信をしていない。市プロジェクトチームメンバーや栄町区長が個人ベースで店舗の紹介を行っている。

大越出身のイラストレーターが、実験後も、自費にて店舗の継続利用を行う（２００９年２月１日～２０１０年１月３１日)。

以前から船引にアトリエを開きたいと思っていたが、船引は家賃が高いことが難点であった。アトリエを構えるのは初めてのことである。店舗の良い点として、改装自由で自分次第で素敵な部屋になる可能性が高いことを挙げている。悪い点としては、①トイレが汲み取り式ということで（汲み取りにきてもらわないといけない等のことで）トイレを使わず駅に借りに行っていたこと、②窓がないので換気が悪いこと、③夜までいると道路に面していてガラス張りの扉なので怖い、ということを挙げている。

空き店舗による市民活動展の良い点は、家賃がかからないことで「みんなやってみるといいと思います。」と答えている。悪い点は、実験なのにもかかわらず殆ど放置で、自分次

第ということだと挙げている。

カフェレガーメとイラストレーターは「自分たちで人を呼ぼう」と共鳴し、イラストレーターの作品を展示した個展「コテン・デ・レガーメ」も開催された（２００９年１１月２４日～１２月６日)。イラストレーターとカフェオーナーはブログも共同で開設している。

カフェのオーナーは船引出身で、郡山周辺・船引周辺で物件を探していた折に、空き店舗による市民活動展を知り、旧氏家薬局の不動産が気にいったため、ここでカフェを開いた。

船引にカフェを開くにあたって、郡山のさびれた倉庫街にあるカフェとの出会いがあったと語る。

「最初は郡山で探していた。郡山で良さそうなところはあんまりなく、２、３件に絞っていた。郡山の物件は、内装屋に見積もりを頼んでいたが、連絡が来なくて、ここがいいということで決めた。源次郎線沿いもみた。

物件を探しながら、お店も回っていて、郡山のニジョウヒピンというお店に来て、船引でやろうと決断した。

ニジョウヒピンは倉庫街のようなところで周りにもっと何もないところにポツンとあった。周りは潰れたお店ばかりで、そこだけ開いていた。店員さんに話を聞いて、周りがしまっているから逆にいいという話だった。売れなきゃいけないと思うが、そんなお店に出逢った。郡山で出す理由はなかった。」

最初は船引にある不動産屋に問い合わせをする。物件をまちづくり実験で使用中だったため、ＵＤＣＴを紹介され、連絡をする。

「大家さんは若い人にがんばってほしいと思っているよう。外に勉強に出かけていたり、広い世界をしっている。栄町通りが活気づいてほしいと思っている。だから、やりやすかったというか、いろいろとワガママを聞いてもらった。トイレを自分でとりつけたり、水周りを自腹で直すから、家賃を下げてもらったり。毎週ベーグルを買いに来てくれる。」

大家さんについては上記のように語られ、良好な関係にあることが分かる。

栄町通りに出店した理由として、

①ＵＤＣＴがあり、空き店舗を活用していて、通りの雰囲気が良くなりつつあること、
②建物の適度な古さ、昭和の木造店舗の雰囲気、
③自分で手を入れられること、
④駐車場が２台あること、
を挙げている。

店主の声からは、船引出身といえど、地域に馴染むまでの難しさが感じられる。

「私たちは（船引出身なので）大阪からぴょんと来たりしたわけではないが、地元の人にとっては、“知らない若い人”。気にしたり、気にかけてもらっているのが分かる。少しずつ知ってる人が増えてきた。

最初に挨拶をした時は、「なに？」というかんじだった。田舎というイメージと違って、よそよそしかった。様子を伺っているかんじ。栄町商工振興会メンバーは最初からよくしてくれている。だんだんと知り合って、最初の挨拶からは印象が変わってきてる。」

これからは「今やっていることをベースに、いろいろ個展を開いたり、ライブをやれるようになりたい。普段使って当たり前のお店に早くなりたい。」と語る。

空き店舗を利用して文化活動の発表の場とする、という内容は、まちづくり基本計画に引き継がれる（４－１．文化界隈『田村市中心市街地まちづくり基本計画』）。

２００９年度は、空き店舗での出展希望者からの声を反映して、出展希望者が常駐しなくても展示ができるよう、まちなか文化祭（ミュージアムストリート）を実施した。

まちなか文化祭（ミュージアムストリート）

栄町商店街から旭通りの６０店舗の店先をギャラリーとし、周辺の幼稚園・小学校・高校、社会福祉協議会、芸術家等の作品展示を行う。“まちなか文化祭”とも呼ばれている。船引地区の文化祭に合わせ、２００９年１０月３１日～１１月２日に行われた。店舗へのアンケートが行われた。

小結

実験期間中に、改善企画が考えられたものの、実現しなかった。
そこに至るまでのＦ氏のプロセスを整理すると、以下である。

Ⅰ　問題意識／やりたいことがある

栄町通りには“手づくりのまち”が似合う、竹炭工房の活動を展開させたい

Ⅱ　提案する場があった

まちづくり実験途中に開かれた見直し会議

Ⅲ　他主体との関係性を構築できなかった

外部の人がリードする立場になるのは困難

5. 空き店舗による市民活動展　まちづくり実験とその後のプロセス比較

まちづくり実験

種類		企画1	企画1-1	企画1-2	企画1-3	企画1-4	企画1-5	準備		準備	準備		準備	実施	企画1-5	評価
意志・課題	まちづくり実験をします	空き店舗を期間限定で廉価で貸します	利用者に企画書を書いてもらおう	火災保険に入ってもらおう	UDCTが貸借者で、転貸契約にしよう	審査基準をつくろう	掃除・改装しよう	店舗所有者の了解をとろう	協力します	利用者を募集しよう	利用者を探そう	利用します	お客を呼ぼう	実施	改善案 お客を呼ぼう 高校生に参加してもらおう	シンポジウム参加者へのアンケート
働きかけ・実施主体						振興会		振興会	1店 1店 3店	区長		地元アーティスト カフェ希望者 版画家 地元ネットTV 都路 船引町ボランティア会 高校 滝根 横浜アーティスト	協力各店	協力各店	振興会 区長 都路 滝根 高校・生徒	
			県													
		学生														
				市PT	市PT			市PT			市PT				市PT	
	UDCT	UDCT		UDCT	UDCT	UDCT	UDCT	UDCT		UDCT窓口	UDCT		UDCT	UDCT	UDCT	UDCT
									家賃値下げ	新聞折込チラシ代(UDCT)				家賃・改装代(UDCT)		

まちづくり実験以降

種類	
意志・課題	
働きかけ・実施主体	

3-2-6. まちなみペイント

内容－２００８　まちづくり実験

老朽化した４つの空き店舗の清掃し、白く塗装を行った。

目的は以下を示している。
①駅前通りは、建物が連続した通りを形成しているが、空き店舗になって久しく手入れされていない状態が続いている。空き店舗建物正面を清掃・白でペイントし、まちなみを明るくすることで、街路の雰囲気を変えてみる、栄町商店街は白を基調とした建物が多いことから、今回の取り組みの場所を示すアクセントとして白を塗り、刷新されたまちなみを体験する。
②今後のまちなみや景観について考える機会にする。

まちづくり実験期間中の２００９年１１月８日に実施される。高校生ボランティアと、建設業組合を通じて鈴船建設・武藤工務店・田村産業の協力を得て行われた。ペイントによって、空き店舗によるまちづくり市民活動展の利用者は使いやすくなり、空き店舗所有者にとって、空き店舗を貸し出すインセンティブになったと考えられる。

①旧氏家薬局
店舗があった一階部分は撤去され、ピロティを形成している。ピロティ部分の内壁が、剝されたままになっており、実験の際、下地シートを剝がし、清掃の後、塗装を行った。

②旧愛知パチンコ屋
全面鉄骨部（ベランダ・テラス部分）の腐食が進んでいたことから、鉄骨の柱・梁・軒天部分の塗装を行った。長期間空き店舗になっており、建物自体の痛みが進んでいるため、長期間の使用は難しいと判断されている。

③旧安田屋

二階部分の看板の木部が腐食し、崩落の危険があったため、破損箇所を撤去した上で、既存の意匠を尊重し、新たな木材による復元を行った。また、壁面（前面）を塗装した。縦格子部分については、空き店舗による市民活動展でのこの店舗使用者（竹炭工芸都店主）との協議により、「炭」をイメージする黒で塗装を行った。

④福田毛糸店

二階軒の高さまで塗装された。テント部分に破損があったため、補修した上で塗装を行った。１店舗（旧毛糸店）はＵＤＣＴの隣に位置しており、ＵＤＣＴと合わせて、白とアクセントカラーのオレンジのペイントが行われた。オレンジは既存のテントの色でもある。

シンポジウム参加者へのアンケート（５３名）では、「どちらでもない」が２２人、「よかった」が１９人と最も多く、「とてもよかった」が１０人と続いた。「気づかなかった」という意見が多かったが、良い点としては「輝きをまして良かった」、「ちょっと活気が出てきた感があった」という声があり、改善点としては「大きく実施したほうがいい」、「白いペンキは明るくも見えるが、逆に寒々しくも見える」という声が上げられた。

内容－２００９　まちづくり実験以降

田村市中心市街地まちづくり基本計画の検討報告書では、まちなみペイントの改善案として、「老朽化した建物の建て替え」「通り沿いの景観の議論・研究」「デザインガイドラインの策定」が挙げられている。

実行プロセス―２００８　まちづくり実験

空き店舗の外壁を白くペイントする、という提案はＵＤＣＴからなされた。

所有者の了解をとるため、栄町商工振興会・市プロジェクトチーム・ＵＤＣＴから呼びかけを行った。空き店舗による市民活動展の依頼の際に同時に行われた。

簡易部分の塗装は、市プロジェクトチームの一人が仲介し、ＵＤＣＴ職員が高校教頭に交渉を行った。危険部分の塗装については、まちづくり実験実行委員会の中で、市プロジェクトチームメンバーが建設業組合に依頼することを提案し、その人物が協力を仰いだ。当初、高校生がシャッター部分をペイントするという話が地元から出ていたが、芸術関係の専門家が全体をコーディネートしないとあまり良いものにならないのではないかという懸念があったため、見送られた。他に提灯をたくさん並べるという案が市プロジェクトチームより出されるが、費用が高かったため断念した。その代わりに栄町区長の声かけによって栄町若連会が旗を通りに並べた。

広報は、ＵＤＣＴが案内文書を作成し、マスコミ各社（ＮＨＫや日経新聞）へ送付した。シンポジウム参加者へアンケートが行われたが、店舗所有者やペイントを見た人に対して個別のアンケートは行われていない。実験後に、感想や改善案を話す場として、第２回シンポジウムが開かれた（２００９年1月２９日）。

実行プロセス―２００９　まちづくり実験以降

まちづくり実験以降、外壁やシャッターのペイントは行われていない。地元からは、シ

ャッターに絵を描いたほうが良いという意見があった。ＵＤＣＴは、ペイント希望者がいれば、もっと大規模に実施したいと話している。

小結

実験によって、まちなみペイント協力者が存在することが明らかとなったが、実験以降は、希望者と協力者をつなげる意向はあるが、企画はないため、実現に至っていない。

6. まちなみペイント　まちづくり実験とその後のプロセス比較

まちづくり実験

種類		企画1					準備		準備	実施	実施	評価
意志・課題	まちづくり実験をします	店舗をペイントします	白にしよう	簡易と危険で分けよう	高校生に頼もう	高校生はシャッターのペイントをしよう	所有者の了解をとろう	協力します	広く知らせよう	塗装（簡易）	塗装（危険）	シンポジウム参加者へのアンケート
働きかけ・実施主体		振興会					振興会■	■1店		■高校	■建設業組合	
		区長						■1店				
								■2店				
		県										
							市PT ■			■市PT	■市PT	
	UDCT	UDCT	UDCT？	UDCT？	UDCT？		UDCT■		UDCT	■UDCT 塗装代（UDCT	UDCT 塗料・刷毛代（UDCT） 足場は有志	UDCT

まちづくり実験以降

種類	
意志・課題	
働きかけ・実施主体	

3-2-7. 田村百景

内容－２００８　まちづくり実験

市民に、これから残していきたい田村の風景を公募（写真）した。応募作品を展示し、市民投票を行った。さらに、風景や景観に関する外部専門家と市長を含めた６名が審査を行い、１００点（２００８年は５０点）を“田村の風景”として認定する。

目的は以下である。
①単なる写真コンクールではなく、これから守り育てて行く田村の風景を市民が発見・再認識する機会となる。
②これまで気づかなかった場所を知る、あるいは合併した他の地区のことを知る機会とする。
③将来的には、田村市の景観計画策定や風景をめぐるルートマップづくりへとつなげる。

応募総数は１７８点であった。審査員は、日本大学准教授（委員長）、東京大学教授（副委員長）、星達夫（連合会長・まちづくり実験実行委員長）、柳沼信太郎（船引町カメラのカタソネ店主）、蒲生芳弘（滝根町蒲生写真店店主）、冨塚宥璟（田村市長）が行う。審査委員会での選定基準は「継承性（後世に残していくべき風景であること）」「場所性（その場所でしか写しとれない風景であること）」「風景性（風景を写したものであること）」「継続性（ある瞬間にしか存在しないものではなく、継続的にあるいは繰り返し現れるもの）」とし、認定された５０点はその後、ＵＤＣＴに展示された。

シンポジウム参加者へのアンケート（４８名）では、「とてもよかった」「よかった」が合計して４分の３を占めた。「初めて見る風景もあった」、「新たな地元の良さを再発見した」という声が多く、好評を得ていた。

内容－２００９　まちづくり実験以降

田村市中心市街地まちづくり基本計画の検討報告書では、田村百景の改善案として、「応募期間を長くし、春夏秋冬の景色を集める」「データでの応募など、幅広いメディアで気軽に応募できる方法の検討」「田村市全域から集める工夫」が記されている。また、百景の活用方法として、「自然豊かな田村の魅力を外部にアピールするために活用する（健康グリーンツーリズム、お試し居住）」「風景をめぐる広域のルートマップづくり（自然文化散歩）」「自然の保全（景観保全計画）」「かるたなどの教育素材」を提案している。

具体的な事業計画としての今後の予定はないが、ＵＤＣＴは、基本計画に書かれているものを今後進めていくことを考えている。まちづくり実験２００８の「アーティストによる滞在企画提案」より制作（ヤング荘）された“たむらかるた”に活用されている。

また、郡山市での展示や教育委員会合唱発表会の背景として、田村百景で選定された風景写真が活用されている。

２００８年は５４景の選定がなされ、２００９年は残りの選定を行うこととなっている。３４９の応募があった。審査会は２０１０年１月２６日を予定している。

田村市内の学校の、卒業式の背景写真として、活用された。

実行プロセス―２００８　まちづくり実験

“残したい風景”を写真で募集し、１００の景色を選定するという企画は、学生が提案した後、市プロジェクトチームとのすり合わせの中で詳細な企画が決定された。市プロジェクトチームと学生とＵＤＣＴとで企画内容を検討がなされた。全体の企画は学生が提案したが、ＵＤＣＴと市プロジェクトチームによって、実現可能なスケジュールが組まれた。選定等の作業が予定されていたため、細かなスケジュールが立てられた。

企画が決まった後、写真の収集・整理は地元コンサルタント会社、市プロジェクトチーム、学生、ＵＤＣＴによって行われる。市民審査と専門家による審査が行われることになり、後者の審査員の手配が行われる。研究室による栄町商店街を対象としたヒアリング調査（２００７年）で写真店店主が、他地域へも講師として招かれるなど、写真についての専門性が高いことが認知されており、市プロジェクトチームは地元の写真店主２名に依頼し、ＵＤＣＴは栄町区長と日本大学教授に協力を呼びかけた。審査員はその他、ＵＤＣＴセンター長である東京大学教授が務めた。

公報にて風景写真の募集を呼びかけ、１７８点もの応募があった。市民審査は１１月１日～１１月８日までＵＤＣＴを会場に行われた。市民審査（一般参加者）を募るため、ＵＤＣＴは新聞折込チラシ（田村市全域)、各行政局・公民館への案内文書の送付を行った。来訪者の多い秋祭り（１１月２日）は、通りにいる人に呼びかけを行い、４０人の投票がなされた。最終審査会は市民シンポジウムの後に同会場（ＪＴ事務所跡）で行われた。

シンポジウム参加者へアンケートが行われた。実験後に、感想や改善案を話す場として、第２回シンポジウムが開かれた（２００９年1月２９日)。

実行プロセス―２００９　まちづくり実験以降

まちづくり実験では５４景が選ばれた。審査員講評で市長が、「(選定基準である）継承性・場所性・風景性・継続性を考え、１００作品に満たなければ５０作品で再募集をかけてもいい」と発言しているように、残りは２００９年に募ることとなった。

前年度は福島県と地元コンサルタント会社の協力があったが、２００９年は市プロジェクトチームとＵＤＣＴで運営を行う。応募数を増やすため、データでの応募を受け付け、

広報に力を入れることが話し合われる。データでの応募の受け付けは、2008 年度に審査会で、市長が提案した。「写真だけでなく、データや文章でもいいのでは？」という提案だったが、文章では特定できないこともあるので、ＵＤＣＴの判断で文章での受け付けは行わなかった。また、広報に力を入れるのも審査会で出た意見である。具体的には、大きな自然風景だけでなく、身近な生活景も募集することが公募書類に記された。広報は、行政区単位で行政局・公民館・各学校や主要な公共施設・民間施設をリストアップして、それぞれ個別にポスター・チラシを置いてもらうようＵＤＣＴがお願をして回った。

２００８年は風景写真の収集・整理は、研究室学生・コンサルタント・市プロジェクトチーム・ＵＤＣＴで行ったが、２００９年は、市の臨時職員でＵＤＣＴスタッフである二名を中心に、市プロジェクトチームが全て作業している（市民投票の集計・応募作品のパネル化・複数個所での展示市民投票に対応するため複数パネルを作成など)。

小結

まちづくり実験以降、田村百景の企画が継続したのは、百景のうち、半数は２００８年に、半数は２００９年に募集しようと、審査員で合意されたからである。その後の継続、活用方法は未定である。

7. 田村百景　まちづくり実験とその後のプロセス比較

まちづくり実験

種類		企画1	企画1-1	企画1-2	準備	準備		準備	実施	評価
意志・課題	まちづくり実験をします	田村百景をします	写真を展示しよう	JT事務所の利用許可を得よう	風景写真の収集・整理	審査員を探そう	協力します	市民審査員を呼ぼう	実施	シンポジウム参加者へのアンケート
働きかけ・実施主体							写真店主A		審査員	
							写真店主B			
							区長			
							市長			
				財政課			日大教授			
		市PT	市PT	市PT	市PT	市PT		市PT	市PT	
		学生	学生		学生				学生	
	UDCT	UDCT	UDCT	UDCT	UDCT	UDCT	東大教授		UDCT	UDCT
					コンサル				コンサル	
			県					UDCT	県	

コンサル代（県 パネル代（UD 光熱代（UDCT）
仮設トイレ（UDCT）　　謝礼代（県）　　チラシ代（UDCT）

まちづくり実験以降

種類		企画2	企画2-1	企画2-2	準備
意志・課題		田村百景をします	データ応募も受け付けよう	広報に力を入れよう	風景写真の収集・整理
働きかけ・実施主体					
		市PT	審査会	審査会	
		UDCT			UDCT

…　2010年1月26日審査会

3-2-8. 市民シンポジウム

内容－２００８　まちづくり実験

実験期間中の２００８年１１月１５日（土）に、「市民シンポジウム～地域と行政と大学の連携による地方小都市の再生～」と題して行われた。

目的は以下である。
①地域と行政と大学が連携して取り組む、地方小都市のまちづくりのありかたを考える公開シンポジウムを開催する。
②田村市のまちづくりについて、これまで取り組んできた各分野の専門家・地元で活動されている方を招き、それらの取り組みを総合的に捉え、議論を深める。これまでの成果とこれからの方向性を市民と共有する。
③田村市各地区でまちづくりをすすめていく地元住民の交流の場とする。

前半で共同研究（田村市・東京大学・ＵＤＣＴ）の今年度の調査の中間報告を学生が行い、まちづくり実験の報告をＵＤＣＴが行った。後半では、ファームハウス都路経営者、福島大学准教授、日本大学准教授、田村市長をパネリストとし、パネルディスカッションを行う（コーディネーター：東京大学教授)。一般参加者からも意見を募り、ポストイットへの記入形式とし、市民意見も含めて議論を行った。ＪＴ事務所跡で開催された。ＪＴ事務所は閉鎖されていたが、シンポジウム開催にあたって、電気等のインフラ整備、掃除が行われた。会後、①まちづくり実験についてと②シンポジウムについてのアンケートが行われた。

シンポジウム参加者へのアンケート（３７名）では半数以上が「役に立った」と回答した。「貴重な意見が聞けた」「田村市の将来について本気で考え話し合っている」「市民の意識づけにはとても役だった」という声が聞こえた半面、「報告が分かりづらい」「文字が小さくて分かりづらい」という意見もあった。ＪＴ事務所跡を会場として利用したことについては、「ＪＴを使ったのがよかった」という意見が多いが、「寒い」という声もあった。

内容－２００９　まちづくり実験以降

田村市中心市街地まちづくり基本計画の検討報告書では、市民シンポジウムの今後の方向性として、「具体的な検討課題に対する協議会」「既存ストックの順次活用」が挙げられている。

２００９年１月２９日「田村まちづくり実験２００８報告会」というテーマで、第２回シンポジウムが開かれる。来賓や報告者（ＵＤＣＴ・アーティスト・東北芸術工科大学）を含め７７名が参加した。

まちづくり実験２００８の報告、船引まちづくり基本計画（提案）の中の「文化創造界隈」についての説明（ＵＤＣＴセンター長　北沢猛）に続き、講演「地方都市におけるアートと地域再生」が行われた（BankART1929 代表、アートコーディネーター）。さらに、三組のアーティストより、船引でのこれまでの調査報告と今後の活動案の提案が行われた。

会後、①まちづくり実験について、②シンポジウムについてのアンケート（市民シンポジウムとは別の内容）が行われた。

また、市民シンポジウムの開催場所として利用された後、２００９年の文化祭のコンサート「フォークアンドポップスコンサート」で利用された。

実行プロセス―２００８　まちづくり実験

市民シンポジウムの企画をＵＤＣＴが行う。場所は、ＪＴ事務所跡を活用する案がＵＤＣＴから提案され、市プロジェクトチームが市財政課の許可を得た。パネリストは、都路でまちづくり活動をしている人物と日本大学准教授、福島大学准教授の三名にＵＤＣＴが協力要請を行い、他にＵＤＣＴセンター長である東京大学教授が務めた。

シンポジウム運営は人手を必要としたため、当日は市下水道課からも協力が行われた。広報は、市プロジェクトチームとＵＤＣＴによって行われ、案内文書を回覧板、公民館、マスコミ各社（新聞、テレビ）に流した。また、学生によって、駅前商店街を中心に、飲食店等にチラシが置かれていた。シンポジウム参加者へのアンケートで、どのような情報手段から（シンポジウムを）知ったのかという質問に対して、「チラシ」「知人から聞いて」と大部分が答えている。

会後、学生とＵＤＣＴによって、①まちづくり実験についてと②シンポジウムについてのアンケートが行われた。

実行プロセス―２００９　まちづくり実験以降

ＪＴ事務所跡の活用は兼ねてからの検討課題であった。駅前の栄町商店街に位置し、建物面積が広いにもかかわらず、全く活用がなされず、老朽化が進んでいたからである。

市民シンポジウムの開催場所として利用された後、２００９年の文化祭のコンサート「フォークアンドポップスコンサート」で利用された。主催は船引地区文化祭実行委員会である。

それまでは文化センターを使用していたが、出演団体の数が多くなると有料になるため、費用を出さない方法がないか検討されていた。カメラのカタソネの店主がメンバーの一人で、ＪＴ事務所跡でシンポジウムをやっていたことを話し、市プロジェクトメンバーと中をすぐに見て、まちなかコンサートとしてＪＴ事務所跡でやることになった。奥の倉庫（元煙草収納）で行う話も出たが、広すぎて音響効果が悪いということで、事務所で実施することになった。ＪＴ事務所は財政課の管理していて、個人的な利用であれば使用料がいるが、文化祭事業の１つだったため無料で使えた。コンサートをＪＴ事務所跡を活用したことには住民からの評判もよい。ＵＤＣＴは２００８年の継続として、会場復旧費（電気・仮設トイレ）については負担した。

小結

実験以降、ＵＤＣＴが主導で企画し、運営を他主体と連携して行っている（第２回シンポジウム）。しかし、地元で企画されて実現したシンポジウム・勉強会に類されるものはない。

8. 市民シンポジウム　まちづくり実験とその後のプロセス比較

まちづくり実験

種類		企画1	企画1-1	企画1-2		準備		準備		準備	実施	評価
意志・課題	まちづくり実験をします	市民シンポジウムをします	学生が展示・発表しよう	JT事務所の利用許可を得よう		パネリストを探そう	協力します	運営協力者を探そう	協力します	参加者を呼ぼう	実施	アンケート実施
働きかけ・実施主体							都路ターン者				パネリスト	
							日大准教授A					
							福島大准教授B					
				財政課					市下水道課			
				市PT				市PT	市PT	市PT	市PT	
			学生								学生	学生
	UDCT	UDCT	UDCT	UDCT		UDCT	東大教授	UDCT	UDCT		UDCT	UDCT
									コンサル		コンサル	
								県	県	UDCT	県	

パネル代（UD・光熱代（UDCT）　　謝礼代（県）　　コンサル代（県）

まちづくり実験以降　第2回シンポジウム

種類		企画2		企画2-1	企画2-2	企画2-3	準備		準備		準備	実施	評価
意志・課題		第2回シンポジウムをします		商工会2階を借りよう	まちづくり実験を報告しよう	専門家に講演してもらおう	外部者に活動提案してもらおう	提案します	運営協力者を探そう	協力します	参加者を呼ぼう	実施	アンケート実施
働きかけ・実施主体						アートコーディネーター		アーティスト1				アートコーディネーター	
								アーティスト1				アーティスト	
								東北芸術大学					
		市PT		市PT	市PT						市PT	市PT	
												学生	
		UDCT		UDCT	UDCT	UDCT	UDCT		UDCT	UDCT		UDCT	UDCT
												コンサル	
											UDCT	県	

謝礼代（UDCT）

まちづくり実験以降　なし

種類	
意志・課題	
働きかけ・実施主体	

3-3. まちづくり実験に見るまちづくりの担い手をめぐる問題

<table>
<tr><th rowspan="2"></th><th colspan="8">まちづくり実験</th></tr>
<tr><th>①
タウントレイル</th><th colspan="2">②
田村味自慢</th><th>③
快適街路実験</th><th>④
イルミネーション</th><th>⑤
空き店舗による市民活動展</th><th>⑥
まちなみペイント</th><th>⑦
田村百景</th><th>⑧
市民シンポジウム</th></tr>
<tr><td>住民等・市職員を中心に企画が実現したもの</td><td>◎</td><td>◎</td><td>×</td><td>×</td><td>×</td><td>×</td><td colspan="3" rowspan="5">住民等・市職員以外を中心に企画が実現したもの</td></tr>
<tr><td>Ⅰ　問題意識・やりたいことがある</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td></tr>
<tr><td>Ⅱ　提案する場があった</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td></tr>
<tr><td>Ⅲ　他主体との関係性があり実行した</td><td>○</td><td>○</td><td>×</td><td>○</td><td>○</td><td>×</td></tr>
<tr><td>Ⅳ　他主体との関係性があり継続した</td><td>○</td><td>－</td><td>－</td><td>×</td><td>×</td><td>－</td></tr>
<tr><td>Ⅴ　別に提案する場があった</td><td>○</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td><td>－</td></tr>
</table>

3-3-1. 協働まちづくりにおける重要プロセス

まちづくり実験とその後の経過を比較すると、「住民等・市職員を中心に企画が実現したもの」が少ない。２００８年のまちづくり実験の企画の評価は必ずしも悪くないため、まちづくり実験以降、プロセスに問題があったといえる。

また、「住民等・市職員を中心に企画が実現したもの」と「住民等・市職員を中心に企画が実現しなかったもの」のプロセスの比較によって、「住民等・市職員を中心に企画が実現しなかったもの」には他者との関係性の構築が欠けていることがわかった。つまり、企画の実現のためには、“他者との関係性の構築”を支援する機能が求められているといえる。

まちづくりの専門家への関わり方の理想像として、“住民・行政といった地元組織が、自

分たちに不足する領域を認識し、そこを補う手法として、自分たちでその領域を担うのではなく、その領域に長けた人物（専門家）を巻き込んで、不足する領域を補う”というやり方が考えられる。しかし、船引町のように、その不足する領域が“他者との関係性構築”である場合、“他者との関係性の構築”が自立的にできなければ、地元組織と専門家との理想的な協働を実現することは難しい。

このように、協働まちづくりにおいて基礎的に必要な“他者との関係性構築”というプロセスに課題がある段階を、“初期の協働まちづくり”と位置づける。

3-3-2.　他者との関係性構築

“他者との関係性構築”について、「住民等・市職員を中心に企画が実現したもの」の分析を行い、考察する。

①タウントレイル（ウォーキング）における、Ａ氏

Ａ氏はタウントレイル（ウォーキング）を実行するにあたって、参加者の誘導を行ったたむらスポーツクラブ、豚汁の提供をした商工会婦人部との繋がりがあった。タウントレイル以外には、ＵＤＣＴの建物所有者、空き店舗による市民活動展に参加した都路町の工房経営者・船引ボランティア会、まちなみペイント・快適街路実験の高校教諭がＡ氏の紹介でＵＤＣＴ或いはまちづくり実験に参加することになった。

Ａ氏は田村市職員であり、前の係りでのつながりが生かされているものが多い。Ａ氏は「ずっと市役所に勤めていて、前の担当課で得たものは、次の担当課でうまく利用すればいいと思っている。参考になるものがある。」と話すが、自治体職員であれば全員前の係りでのつながりを持つわけではない。

Ａ氏に声をかえられ、話し合い（田舎貸します事業検討会）に参加した栄町商店街の商店主は、「今日あんまり人がいないようだから、悪いけど来てくんないかとＡ氏に言われ、行ったこともある」と話している。Ａ氏は現在は市プロジェクトチームではないが、この店舗に「ちょくちょく来る」ため、「（市プロジェクトチームに関わっていた頃の）Ａ氏の苦労も分かるんだ」と話している。

また、Ａ氏は、まちなみペイント・快適街路実験で高校の教諭・生徒が参加した経緯について、

「教頭先生が積極的でリーダーになってくれた。こういう風に引っ張ってくれる人がい

ないとだめ。（私も）しょっちゅう学校に顔を出していた。ＵＤＣＴやまちづくり活性化実行委員会の顔を覚えてもらいたいと思っていた。依頼はいきなり言ってもできない。顔なじみになってから。」と話しており、

＜何か事業が成立してからではなく、日頃から会いに行くこと＞の重要性が伺える。

②田村味自慢における、Ｂ団体の他者との関係性構築

Ｂ団体会長Ｇ氏は、田村時自慢・快適街路実験・イルミネーションにおいて、団体の結束を高めてきた。Ｂ団体のまちづくり実験実行委員会への出席率は高い。快適街路実験では、オープンスペースでカフェをするという実験があったが、冬場だったため、企画に疑心暗鬼になる店主もいたが、Ｇ氏が「いいからやってみっぺ」と声をかけ、参加する。また、まちづくり実験後に栄町商店街でカフェを開いたオーナーは、オープン当初、地域に馴染めるか心配をしていたが、「Ｇ氏は最初から良くしてくれている。」と話している。

Ｇ氏は、人との関係づくりについて、

「声かけをする。反省会でごくろう様という。お寿司屋さんの桶を１つ買う、レストランを使う、お酒を買ったり。そういうことをしていると手伝いにくる。

若い人に反省会で「どうしたんだ」と話しかけたり、「もうちょっと飲め」とか言ったり。大切にする。それが俺のやり方。そこまで気を遣わないとだめ。

飲ませて話を聞くのは簡単。気持ちが大きくなるし。だから、しょっちゅう飲んでる。あまり話しない人も、飲んで話すと、そんなこと考えてんだとわかる。

・・・銭金じゃなくなる。コイツが言うなら、ボランティアでもやらなきゃとなったらこっちのもの。みんなが２０００円払うところを３０００円とか５０００円とか払ったりする。家庭も犠牲になるが、その信頼は長い目で見れば決して損ではない。あの人がやってくれたからとなる。」と話す。

＜オフィシャルな場ではなく、それ以外の場で別の関係をつくること＞
＜大切にする、という態度を示すこと＞が重要であると伺える。

まちづくりは結果がすぐには見えない場合が多いため、「いいからやっぺ」で集まる関係性の構築は必要である。

しかし、Ｂ団体は高校や商工会との関係性を構築することは苦手としていることも伺える。商店街内での結束だけではなく、他地区の人との関係性を構築することが求められる。

③田村味自慢における、Ｃ氏

Ｃ氏は堀田屋旅館を活用するにあたって、堀田屋店主から店舗をふたつ返事で借りたという。その経緯について、Ｃ氏は

「何度も通った。・・・（五月祭は五月だったが、）堀田屋は自分で２ー３月頃に交渉した。」と話している。

＜それ以外のところで別の関係をつくる：とにかく通う＞

以上より、“他者との関係性構築”の必要条件は、コミュニケーションの在り方において、業務が発生したり、必要に迫られてからお願いに行くものではないことが分かる。初期の協働まちづくりの実現に導いた要素が、組織形態や企画内容、人材育成の研修だけではなく、多層的関係性の構築であったといえる。

結章

地方小都市における初期協働まちづくりにおける専門家の役割について

結-1.　初期協働まちづくりにおいて必要とされる領域

実行計画の欠如の中で決定的なのが、解決主体の問題である。船引町の各種報告書においても、事業を提案する段階で、解決主体の必要性は再三述べられているが、その具体的な方法については言及されていない。各店舗の自助努力を期待するものが多い。実現に向けて活用できる事業・融資制度に関する詳細なリストが作成されている計画もあるが、そのほとんどが実現に至っていないことからも、人づくり・体制づくりに不備があることが伺える。逆に、「〇〇委員会」「〇〇クラブ」をという形で体制づくりについて記述した計画はあるが、本来的に協力体制が養生される方法については、言及されたものはない。（第２章）

船引町のような、協働まちづくりがあまり実践されてこなかった地域においては、他者との関係性の構築が重要である。そして“他者との関係性の構築”とは、形式的に同じ委員会に入っていることや、名刺を交換することではなく、

＜何か事業が成立してからではなく、会いに行く＞
＜オフィシャルな場ではなく、それ以外の場で別の関係をつくる＞
＜大切にする、という態度を示す＞
＜それ以外のところで別の関係をつくる：とにかく通う＞

という要素が必要であることがわかった。

そのような経験が増えたり、自主的に他者との関係づくりができるようになれば、不足しているプロセスを柔軟に補えるようになると確信する。

また、地域特有の関係性構築方法があることも確認できた。Ｇ氏の発言で「飲ませて話を聞くのは簡単。気持ちが大きくなるし。だから、しょっちゅう飲んでる。あまり話しない人も、飲んで話すと、そんなこと考えてんだとわかる。」とあるように、船引町では“飲み会”は重要な場だと言える。

本研究のヒアリング調査においても、飲みながらのヒアリングを希望する人が数名いた。実際に、飲みながら３時間お話を伺った方からは、「ＵＤＣＴの人にこんなにいろんな話をしたのは初めて」という声が聞かれた。地域あるいは相手の好みに会ったコミュニケーションの場は重要である。

地方小都市における初期協働まちづくり

地方であれば、人間関係が“温かい”というイメージがあるが、関係性の構築は容易ではない。船引町に来た当時のことについて以下のような声が聞かれた。

「前に住んでいたところは新興住宅地で、地域でもマンモスと呼ばれていて、人の出入りも多いところだった。だから、誰が来ても打ちとけられる。船引に最初に来た時は打ち解けるまでに時間がかかった。」（H氏）

「最初（船引町にきて）挨拶をした時は、（町の人は）なに？というかんじだった。田舎とイメージと違って、よそよそしかった。様子を伺っているかんじ。気にしたり、気にかけてもらっているのは感じていた。少しずつ知ってる人が増えている。最初からよくしてくれている人もいる。・・・だんだんと知り合って、最初の挨拶からは印象が変わってきてる。」（Ｉ氏）

「外部の人がリードする立場となるのは難しい。言いにくい。話す場はあっても意見は出しにくい。」（Ｊ氏、他地区）という声もあった。

人の出入りが少ないため、人間関係が硬直化しており、コミュニティ外の人（団体）が、入っていきにくいことがわかる。また、コミュニティ外の人（団体）が、まちづくりでリーダーシップを発揮しにくいことも考えられる。

これは地方小都市特有の課題といえる。

結-2. 提案：初期協働まちづくりにおける専門家の役割

初期協働まちづくりにおいて専門家は、“他者との関係性構築”を支援することが求められる。そのためには、まず地域に特有の関係性構築方法を知ることである。また、住民等の関係性構築方法では足りない部分（普段近くにいない人への働きかけなど）を見極め、新たな展開のために、専門家自ら働きかけることも求められるだろう。初期以降は専門家が重点を置く役割は変化すると考えられ、そのつど不足するプロセス（領域）について判断する必要がある。

謝辞

この論文の執筆にあたりお世話になった方々に感謝申し上げます。

「まちづくりって楽しいはず。」　ずっとこの思いがありました。

生まれ育った北九州市小倉北区の商店街との出会いから、私のまちづくり道が始まりました。人によって抱えているまちづくりの課題が違うけど、もっと手をつなげば、あの人のあの問題も、この人のこの問題も解消しそうなのに。手をつなげたら、どんなに楽しいまちができるんだろう。そんな夢から出発しました。

“楽しいはず”という思いとは裏腹に、約１年ぶりにお会いした船引町　栄町商店街の方々の意気消沈した姿と、“ＵＤＣＴはもう終わった”“あってないようなもの”という言葉は、ショックで悔しさが残るものでした。まちづくり実験以降の経過を言葉にしなければ、と思いました。

まちづくりでは、何ができた、どんな数値がどれだけ上がったということと同じくらい、地域の人の気持ちが重要だと思っています。このことを説明する時は、“持続可能性のために”“地域の人がエンドユーザーだから”と言ってみたりしますが、ほぼ直観的な意志です。

船引町で私は“おせっかいおばさん”と化し、たくさんの方にお話を伺わせて頂きました。栄町商店街の方の、これまでの苦労も知って、グチっぽくなることに共感しつつ、それでも、「住民がＵＤＣＴに協力」ではなく、「住民がＵＤＣＴを利用」してほしい。最初のヒアリングが終わった後、一番に思ったことはそれでした。ヒアリング以外の場でも、お店・家の自慢の味を食べさせて頂いたり、柿を頂いたり、送別会を開いてくれたり、ありがとうございました。

また、田村市職員、ＵＤＣＴスタッフの方々に感謝申し上げます。訪問中は気にかけて頂きありがとうございました。特に、堀越さん、鎌田さん、田中さんには、論文提出直前まで多大な協力をして頂き、感謝しております。

研究室を先に卒業した先輩・同期からも多くの励ましの言葉を、手紙やメールで貰いました。
特に、柏原さんの先行研究がなければ、本研究は全く成り立ちませんでした。中間領域という概念を０から立ち上げた柏原さんの研究に、私が毛を生えさせてもらえていれば嬉しいです。電話で、「まちづくり実験のその後、気になるよね！」と話した深夜から、エンジンがえらく回り始めました。

私は論文を執筆する直前まで福岡にいたため、研究室の後輩との“関係性構築”はほぼできていないままでした。にもかかわらず、論文執筆の手伝いを快く引き受けて頂いた小島くん、竹田さん、丸上くんを始め、研究室のメンバーに感謝です。

前田さん、丹羽さん、田口さんにも、感謝申し上げます。久しぶりにＵＤＣＫに行っては、「お～、さこちゃん～」と驚いた顔をされることが妙に嬉しかったです。田村でのプロジェクトでも大変お世話になりました。

信時先生にも感謝しております。考えがまとまらない頃でも、肩を叩いて頂き、心強かったです。信時先生のように、全幅の信頼をおける大人が側にいたからこそ、“信頼関係”をテーマにした論文が書けたと思っています。

清水先生には、何度も何度も指導をして頂きました。性格や考え方のクセを全て見透かされている思いでした。最初は構えていましたが、構える必要がないことが分かってきて、先生にはご面倒をおかけしましたが、研究を通してのやり取りが楽しかったです。

本当に、周囲の人に支えられていることを実感する研究生活でした。

そして、遠く福岡から見守ってくれた父母に感謝です。自由にさせてもらっていることにも気がつかないくらい、ずっと自由でした。「もう気持ちは決まってるんでしょ」の一言で、これまで随分のびのびとさせてもらってきました。本当にありがとう。

最後に。本文は、およそ体をなさない箇所も多くありますが、こんな論文だけど、北澤先生のコメントをもらいたかった。「結論がおもしろくない。」「つながりがよく分からない…」「で、何が言いたいの？」「ん・・・。」　　と言われても。

船引町（ＵＤＣＴ）を対象とした論文執筆は、まさに実践と研究の間であり、北澤猛（空間計画）研究室の醍醐味でした。どこまで解を見出せたか分りませんが、社会に出ても、実践と研究の間に身を置く、ということに意識的でありたいです。

先生からどんなに面倒な学生だと思われても、もっともっとしつこく側にいて、同化するほど北澤マジックを吸収したかった。１０月の論文中間発表にいらした先生の姿を思いだすと、胸がつまります。見守って頂き、ありがとうございました。

先生が、社会システム（ＵＤＣ研究など）を実践的に提案する姿、茶目っ気のある笑いのとり方、厳しい語り口調、私に飽きれる顔など、全てが私の宝物です。

明日の都市づくりをになう北澤っ子の一人として。
これからも、先生が近くで見守ってくれていることに思いを寄せて。

2010 年 1 月 25 日　柏の葉キャンパス　大院生室

佐古　奈々美

引用・参考文献

・『地域小売商業近代化対策調査事業報告書』船引町、昭和 57 年（1982 年）
・『船引町商業活性化ビジョン』船引町商業活性化委員会、平成 3 年（1991 年）
・『船引町地域小売商業活性化推進事業報告書（まちおこし事業）』船引町商工会、船引町地域小売商業活性化推進事業委員会、平成 6 年（1994 年）
・『若手後継者等体験研修事業報告書』船引町商工会、平成 8 年（1996 年）
・『船引町地域づくり計画』船引町、平成 10 年（1998 年）
・『船引町地域づくり計画（概要版）』船引町、平成 10 年（1998 年）
・『船引町都市計画マスタープラン』船引町、平成 10 年（1998 年）
・『船引町長期総合計画（後期基本計画）２１世紀のプロローグ』船引町、平成 10 年（1998 年）
・『船引町中心市街地活性化基本計画』船引町、平成 15 年（2003 年）
・『船引町中小小売商業高度化事業構想　船引町　ＴＭＯ構想』株式会社まちづくりふねひき、平成 16 年（2004 年）
・『船引町の歩み―船引町閉町記念誌』船引町、平成 17 年（2005 年）
・『田村市中心市街地まちづくり基本方針検討報告書』北沢猛、平成 20 年（2008 年）
・『「田村まちづくり実験 2008」報告書』田村地域デザインセンター、平成 20 年（2008 年）
・『地方小都市における変容する地域空間構造の把握–福島県田村市での中心地域と周辺集落の関係をケーススタディとして–』松尾真子、平成 20 年（2008 年 8 月）
・『地方都市のまちづくりにおける中間機能に関する研究–福島県田村市船引町の中心市街地をケーススタディとして–』柏原沙織、平成 21 年（2009 年 1 月）
・『田村市商業まちづくり基本構想』田村市、平成 21 年（2009 年）
・『田村市中心市街地まちづくり基本計画検討報告書』北沢猛、平成 21 年（2009 年）
・『船引まちづくり基本計画策定に向けた検討』田村地域デザインセンター、平成 21 年（2009 年）